第22回

住まいとコミュニティづくり活動助成 報告書

一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

第22回

住まいとコミュニティづくり活動助成　報告書

一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

本報告書は第22回（2014年度）「住まいとコミュニティづくり活動助成」の助成対象団体の活動報告を掲載しています。各団体の報告につきましては、例年のように助成対象団体のメンバーに執筆していただいた原稿を基に、事務局で全体のバランスを考慮して内容の追加及び整理をさせていただきました。

2014年度の当助成事業においては224団体からご応募をいただき、本報告書に掲載されている10団体が助成対象として選ばれました。全国46都道府県からお申し込みがありました。ご応募にあたっては、申込時点における団体の活動時期を5つの選択肢から選んで記入していただいています。5つの選択肢は、①立ち上がり期、②発展・飛躍期、③安定期、④停滞を打破しようとしている時期、⑤その他、です。ご応募いただいた全224団体の内訳を見ますと、②発展・飛躍期が53%、①立ち上がり期が31%、④停滞を打破しようとしている時期が10%、となっています。自らを発展・飛躍期と捉えた団体がステップアップのきっかけとして当助成事業の活用を考えられたことが伺われます。また、立ち上がり期と認識されている団体には、当助成事業を追い風として船出したいとお考えいただいたようです。発展・飛躍期の団体には、新たな展開を臨んでいただけるような、立ち上がり期の団体にはやさしく寄り添いぽんと肩を押してあげるような、そして停滞を打破しようとしている団体には多様な可能性を示すことができるような、各団体の活動時期に沿った助成事業でありたいと考えます。

本報告書の各報告には、多様な主体と適度な関わりを持ちながら、その地で生きる人々の日々の生活を豊かにしたいという思いが様々なかたちで現わされています。時代や地域性、人のあり様なども異なりますから、ここに掲載した事例を他の土地でそのまま転用できるわけではありません。しかし、地域に根差して生きるという思いは、共有できるのではないでしょうか。

誰もがめまぐるしく流れる時の中で過ごしており、ここに掲載された活動は既に過去のものです。助成対象団体の皆様には、過去にとらわれずに、今を、そしてこれからを造られていくことを期待します。また、自立の道を探求するなど、意義ある活動が継続できるような術を獲得していただくことを願っています。

最後になりましたが、助成対象団体のメンバーの皆様、団体を勇気づけてくださる選考委員の皆様、そして、当助成事業に関心をお持ちくださる方々にお礼を申し上げます。

2015年9月5日

一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

6　北海道清里町

きよさと移住者ネット

農業に従事する移住者を中心に結成された団体。移住者同志の交流を図り、不安や孤立を取り除き新旧住民の良好なコミュニティを醸成するとともに、移住希望者のコーディネーター的存在となることを目指している。今年度は、食事会（地元の食材で郷土料理などを作る）やガイドツアーによる登山、イベントへの出店、産後ケア講座等を行う。新住民のネットワークが旧住民に好影響を与え、地域の活性化につなげることも考えている。

14　山形県川西町

特定非営利活動法人 えき・まちネットこまつ

無人駅化への危機を打破するために、地元の高校生やOB・OGを中心に駅の業務の受託や、地元の農産物を活用した駅前でのチャレンジショップの運営などに取り組んできた。助成対象活動では、地元を訪れたイザベラ・バードの足跡を辿る古道を復元し、地元出身の井上ひさしの生家や資料館、作品に登場する神社などを回るルートを整備して、まちなか巡りを実施する。観光資源の開拓による町民駅の利用者の増加を見込んでいる。

22　東京都福生市

特定非営利活動法人 FLAG

東京の西多摩地区を拠点として、地元のアイデンティティを見つめ直そうと若いアーティストたちで結成された団体。横田基地を有する地域の文化的資源ともいえる米軍ハウスだが、その数は年々減少している。これまでに解体予定だった一棟のハウスを改修し、活用のための調査研究を行ってきた。今年度はこのハウスを拠点に酪農家と連携した農業体験や、アーティストを招いたイベント等を行い、地域の新しい魅力づくりにつなげていく。

30　新潟県長岡市

特定非営利活動法人 醸造の町摂田屋町おこしの会

江戸時代からの醸造業が集積した地域資源として、昨年、一部が整備された「機那サフラン酒本舗」の蔵屋敷を対象とする活動。地元醸造業の経営者が中心メンバーとして名を連ねている。建物と庭園を一般公開し、保存を願う市民の会も立ち上げられた。今年度は建物に応急処置的な補修を施し本格修復に備える。邸内整理や庭園整備などに住民の協力を得るとともに、イベントや冊子を通して観光資源としての価値を増大させる。

38　福井県小浜市

特定非営利活動法人 WACおばま

かつて桐油が基幹産業だった地域には、産業が衰退した後もアブラギリが生い茂る。アブラギリの可能性に着目し、昨年は地元の高校生と協働して種の圧搾方法の確立、葉寿司の開発、きのこの原木化などに取り組み、成果を住民に披露した。今年度は、アブラギリの地域産業化に向けて、地元企業と連携した食の開発、若狭和紙を活用した商品開発などを行い、拠点を活用してアブラギリをテーマにした体験型観光の可能性を探る。

46　岐阜県中津川市

加子母むらづくり協議会

地域の自立を目指し全住民が参加して組織化された団体。平成7年から各地の建築系の学生を招き加子母木匠塾を開校して、地元の工務店の指導の下、実践的な建築を学ぶ場を提供し住民との交流も図ってきた。木匠塾を開校して20周年を迎える今年度は、学生に例年行っている木造建築物の制作に加え、メモリアル行事として、明治27年に村の有志によって建てられた芝居小屋「明治座」の改修を住民との協働で行う。

54　三重県伊勢市

特定非営利活動法人 旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議

最盛期には伊勢に800軒ほどあった御師邸だが、唯一現存しているのが旧丸岡邸である。地域で歴史的建造物の保存・活用の実績を有するメンバーが活動に携わっており、これまでの保全修理が実を結び、御師邸の内部が使用できるようになってきた。使用可能な空間において地域の歴史文化を紐解く御師塾の開催や、おもてなしの精神を今に伝えるお弁当の商品化など、御師を切り口とした地域ブランドの形成を目指している。

62　三重県熊野市

かやの木会

地域のシンボルである古民家（茅の木館等）の保全について調査研究するとともに、山村体験施設として古民家を活用する方法について検討する活動。高齢化が進んで限界集落となってしまった地区において、これまでに調査フィールドとして湯谷地区を訪れてきたいくつかの大学と連携のもと、大学生に滞留してもらう山村遊学、村都連携ネットワークの構築等を行う。地元の人と大学との協同で、山の記憶を後世に残すことを目指している。

70　京都府城陽市

ダッズ村プロジェクト

現役の父親たちが、子どもたちや次世代の親となる若者の育成を目指して行う家づくりの活動。家づくりにあたっては、「原理原則のものづくり」を掲げ、父親、若者、子どもが一緒になって、稲刈り、土壁づくり、竹小舞編み、内部造作工事までの実際の家づくりを、可能な限り地域でとれる材料を使うとともに、電動工具などは使わずに肉体労働で行う。一連の作業を通じて、親同士の交流、子どもの健全育成を目指している。

78　広島県江田島市

ぐるぐる海友舎 プロジェクト実行委員会

江田島は海軍兵学校があった場所であるが、これまで兵学校があることにより江田島の暮らしにどのような影響があったかについて、きちんと語られることがなかった。兵学校の施設である「海友舎」の再生・利用を通して地域の問題解決につなげるため、地元および周辺に居住している人々が江田島の歴史を学び、地域の高齢者に江田島の暮らしについてヒアリング調査を行う。これらの成果を冊子にまとめることで地域文化の継承を図る。

86　総評・講評

91　応募要項

※ここに記載している「団体・活動概要」は、助成決定時の資料に掲載したものです。

創ろう!!
移住後の田舎暮らしを支えるネットワーク

きよさと移住者ネット［北海道清里町］

団体設立の経緯

近年、「人生の楽園」を求めて田舎暮らしがしたいと思う方の増加と、それに伴い移住推進事業をしている自治体や民間の組織が増えています。しかし、安易な農家の嫁募集、単なる物件紹介など、来てもらったらそれで終わり、というだけでは定住にはつながりません。現実問題として、新しい家族や地域の人々に馴染めずに家にこもりがちになることがあります。その結果、孤立し、精神的に疲労し、自身の人生設計や田舎暮らしそのものに疑問を感じ、離町されたケースも多く生じています。私たち移住者も同じような思いをしてきました。
同じような境遇を経験してきた人とコミュニケーションがとれる場、悩みを共有し問題の解決方法を一緒に考える仲間が必要です。
そこで、新たに清里町に移住したいと来られた方が、元気で楽しく暮らせる術を見出せるようにしたいという思いで老若男女、移住歴を問わない移住者のネットワークを作ろうと考えました。そのためには私たち移住者自身が元気で楽しく暮らすことも必要です。急速に過疎化が進む清里町の政策とも方向性が一致し、平成25年には町の助成金も受け団体を設立することが出来ました。

地域概要

清里町は北海道の東部の知床の付け根に位置し、人口は約4,400人。人口減少が進んでいる地域です。オホーツク海も近く、冬には流氷が観られます。日本百名山の一つである斜里岳は道東のマッターホルンとも呼ばれています。水が豊富で斜里川には、幻の大魚イトウが生息しています。そして観光名所の摩周湖があり、青緑色の水面の神の子池があります。さくらの滝では初夏にサクラマスが遡上する姿が観られます。農業が盛んで馬鈴薯、小麦、甜菜の三作が主に生産されています。特産品は日本で初めて作られた『じゃがいも焼酎』です。町で育てた馬鈴薯を原料にしています。
「花と緑と交流のまち」をコンセプトとして、行政と住民のパートナーシップによりまちづくりが進められ、6月から8月にかけて大地には作物のパッチワーク模様が、町中には鮮やかな美しい花がみられます。
また交流活動が盛んで、地元の小学校では山村留学を、高校ではニュージーランドの高校と姉妹校提携をしており、ニュージーランドへの研修旅行をはじめ、両校生徒の交換留学制度もあります。

設立年月 ･･･ 平成 25 年 6 月
メンバー数 ･･･ 運営メンバー　5 名／参加メンバー　23 名
代表者名 ･･･ 澤田 眞優美（さわだ・まゆみ）
連絡先 ･･･ 〒099-4401　北海道斜里郡清里町上斜里 40 番地
団体のミッション ･･･ 移住者の心のキーパー的存在、移住希望者のコーディネーター的存在として、地域の人々や関係機関と連携しながら、一人でも多くの方に清里町に住んでいて良かったと思ってもらえるようにサポート活動を行っています。

この地域のシンボル、斜里岳。

活動に至った理由や背景

私たち会員は清里町に移住してきましたが、他の移住者と繋がりがもてない状況でした。親戚や知人もいない中で知り合いを作る機会がなかなかもてませんでした。農業中心の地域なので転入する人が少なく、ほとんどが昔から住んでいる人です。家と家との間は歩いて10分、または車で5分以上かかる場合もあります。

この様な地域で、最初は本州から来た私たちのような農家の嫁のネットワークを創ろうと思いました。同じような悩みを抱えている方々の交流を図ることが必要だと感じたからです。ですが、この地域で暮らし、子育てをしていく中で、農家の嫁だけではなくて様々な理由で移住してきた方々がいることを知りました。そしていろいろな職種の方がいるので、情報を共有すればもっと楽しく暮らせるのではないかと思いました。

様々な活動を通して、よそ者扱いされがちな移住者同士がポジティブに暮らしていける場があればいいなと思いました。昔から住んでいる地元住民とも繋がることにより、地域の生活文化を大切にしながら新たなコミュニティが創造される事が期待できます。

今年度は以前からしてみたかった事、できなかった事が助成を受けたことで行うことができ、また更なる提案への目安にもなりました。私たち農家のお母さんにできるかな？と不安がありましたが、企画に沿った活動を通してイベント実施、人間関係づくり、そして地域の繋がりを創出することができました。

活動の内容と成果

6月

グランフォンド きよさとに参加

清里町の広大な自然風景を観ながら、地元産の食材を使った食べ物をポイント場所で食べ、自然の中を走るサイクリングイベントです。初心者から上級までの4種類のコースがあります。参加人数を増やし活性化になればという思いで、移住者ネットで協力しました。山村留学で来ている親子や、50代男性で移住体験のため参加された方もいます。清里町長自らもこのイベントのママチャリレースに参加されたので、気軽に町長と清里町の風景や暮らしを語り合うことができました。

7月

産後ケア・アロマ講座

町外から講師を招いてアロマ講座を行いました。

産後ケアを一緒にしてもらおうと、移住者ネットの会員以外の方にも参加してもらう企画にしました。小さなお子様連れの母親がイベントに参加するには、子供の託児が必要になります。特に町外から来られたお嫁さんは、実家に子供を預けて自分の時間を楽しむ機会がありません。産後にストレスが溜まるばかりです。そして孤立するという悪循環に陥ります。そこで託児を地元住民で頼れるおばさんに相談しました。するとすぐに子育て支援ファミリーサポートと繋がりができ、町民の年配のご婦人達に協力して頂けるようになりました。今後は移住者ネットの託児を、斡旋を相談した頼れるおばさんが引き受けてくれることになりました。

託児があったので母親達は集中して講座を受け、楽しむことができました。今回は、参加したいけれど託児が無いので参加できない、という小さなお子様がいる世代の母親たちのニーズに、応えることができました。

8月

地元産で作る カレー懇親会

町の施設を利用して行いました。

カレーは地元産の玉ねぎと牛肉を使用しました。昨年は、お子様連れで参加した方が十分にお話することが出来なかったという反省から、今年は、調理をしている時にだけ託児をお願いしました。カレーなら色々な野菜が使え、誰でも料理が出来、食べやすいメニューなので行って良かったです。

清里町で約10年前に移住者の集まりがあったのですが、その後無くなってしまい、移住者同

上:清里町サイクリングイベント（グランフォンド）
中:産後ケア・アロマ口座
下:町内の方の協力による託児模様

士の繋がりが弱く、情報が少なくなっていました。昨年、会を立ち上げた時に町内で10年ぶりに移住してきた方の集まりを催しました。その時も作って食べるカレー懇親会でしたので、これからも定期的に集まって地元産の野菜を知って貰える機会にしていこうと思います。物を作りながら交流を図るのは気軽に話せて楽しい！ですし、食べて美味しい！です。

9月

清里町ふるさと産業祭り

町で一番大きなイベントで、清里町の特産・名産品が販売され、町の飲食店や団体の店が並びます。会員で青森出身のご夫婦の提案で、B-1グランプリで有名な『せんべい汁』を作り販売しました。また会員の方の出身地の美味しい食べ物のお取り寄せ、会員の作った農作物や雑貨も販売しました。

前日からブース準備や食材準備などを手伝える人で行い、一緒にものづくりをする事で親睦を深めることが出来ました。ものを販売することで、知らなかった方とお知り合いになれたり、移住してきた方を支える団体、「きよさと移住者ネット」があるという事を町民の方に知ってもらういい機会になりました。

斜里岳登山

毎日見ている秀峰1,547mの斜里岳。

住んでいても意外と登山したことがないということで「清里町へせっかく来たのだから斜里岳に登ろう！」と企画しました。初心者でも安心して登山が出来るようにガイド付きにしました。
当日は小雨で4名が欠席になりましたが、参加した5名は無事に登頂出来ました。
自然にふれあい斜里岳に魅せられ、山登りにはまった会員もいました。

町のイベントで東北の特産品「せんべい汁」を作って販売。地元住民と他府県のグルメで文化交流を図る。
10時から販売して約2時間で完売！

左:斜里岳山頂で記念写真
中・右:四季の風景を魅了する斜里岳

スキップロードフェスティバル

清里町のマラソン大会（斜里岳ロードレース）前日に行われる商工会主催のイベントです。

今年の出店の条件は地場産小麦を使った料理でした。
会員から「冬の懇親会で作ったたこ焼きを出してみよう！」と提案があり企画を進めました。たこ焼き器を購入し、会員の子供達も一緒に作り販売しました。

また町民の方に少しでも地場産小麦に興味を持ってもらい消費してほしいと思い、会員の農業改良普及センター職員の方に清里町の小麦の事を教えてもらい、小麦の資料を紹介しました。

今まで移住者ネットの会員が個人で出店していましたが、今年は「移住者ネット」のPR、会員のお店の紹介などをチラシやパネルを使って行いました。お客様の中で他府県から来た方がいらっしゃって、「清里町に移住したいがどうでしょうか？」と聞かれる方もいました。清里町の良いところを伝え、「きよさと移住者ネットではいつでもウエルカムです。」と答えました。

親子ダンスイベント（POTATOPARTY）

今年度の企画案を出していた若いママさんが、出産で参加出来なくなりました。

別の若いママさんが、今後のまちづくりに向けてチャレンジしたいと提案した親子ダンスのテストイベントです。

町内の大きなホールを利用して、きよさと移住者ネットだけではなく、町をひっくるめた親子（未就学児）対象のイベントとして企画し、教育委員会も後援してくれました。始めは提案した本人に自信がなく、「無理かな…」といっていましたが、企画・準備を進めて行く中で母親達の結束力と女子的思考が全開し、また先輩ママ達のアドバイスなどにより前向きな気持ちになって実施したことで、達成感を得られたようです。

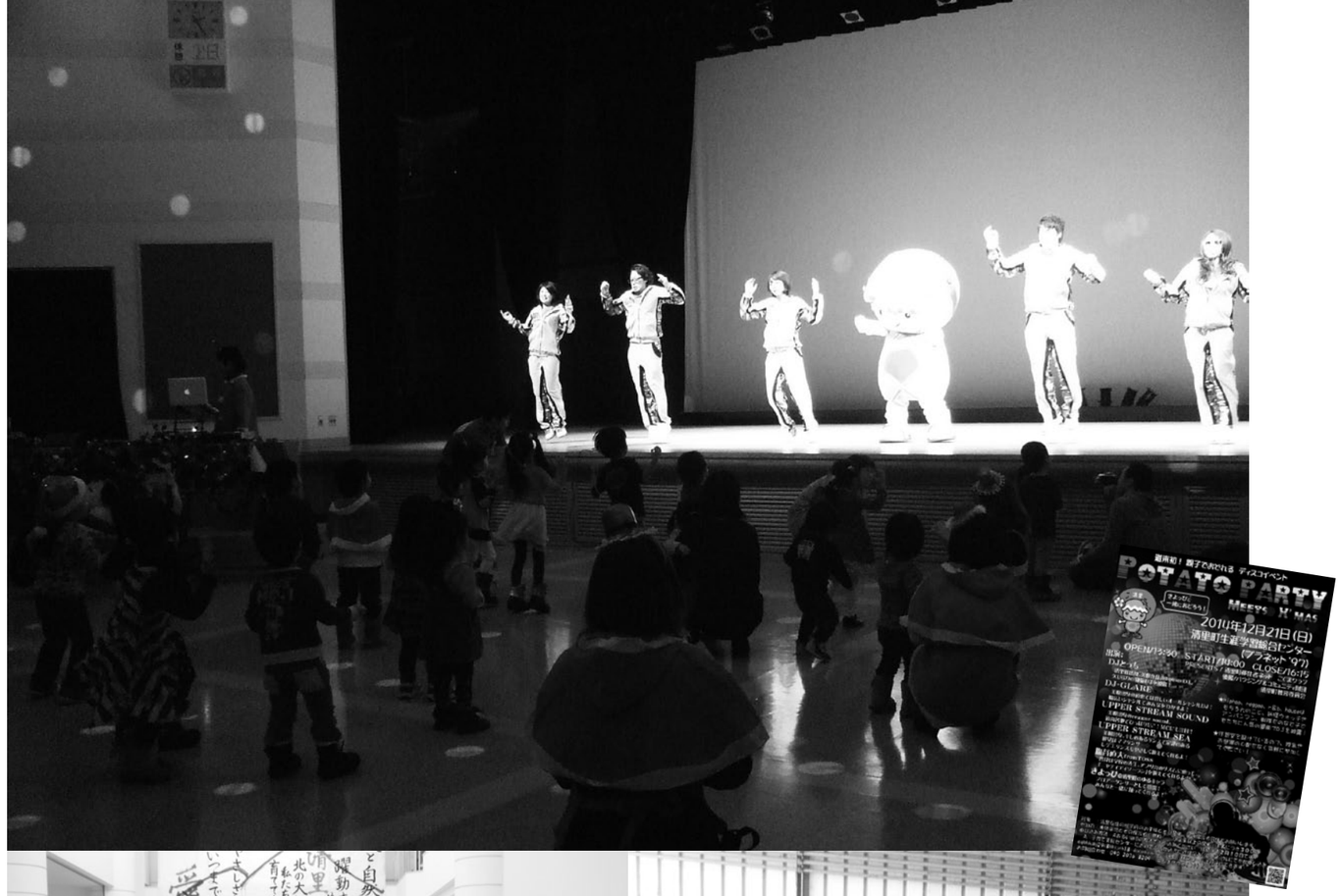
提案・企画した若いママがDJでもあり、道内在住の清里町出身の知人DJが来られ、近隣の町のダンサーも応援で来られました。町内のまちづくり団体「ゆいま～る清里」による妖怪ウォッチダンス、町のゆるキャラ「きよっぴー」と踊るダンスタイムがありました。清里高校ユネスコ部は仮装をして子供達の安全管理と盛り上げの役割で協力してくれました。イベント時間が3時間もあるので自由な空間を確保し、プレイルーム、授乳室を設け、町内の六次産業化実践者にお願いをして出店の協力をしてもらいました。時期的にクリスマスが近かったので元清里高校校長で定住された方にサンタクロースになって頂き、子供達にお菓子のプレゼントをしてもらうサプライズな場面づくりもしました。

企画に携わった方の提案で、来られなかった方や町内の方にお知らせするために、イベントの様子を掲載したポスターを、イベント終了後すみやかに町内のお店や公共施設に貼りました。会だけのイベントではなく、町民の方に協力をして頂き、また応援して頂いた事により構想していたものより盛大に楽しく出来ました。やってみたいと思ったことを提案する際の目安を見つけることが出来ました。

1月

清里町箱ものツアー

住んでいても意外と知らない地元のお宿。移住者ネット関係の家族や知人が来た時に利用できるのではないか、宣伝効果になるのではと企画しました。宿泊しないとみられない室内を交渉して特別に見せてもらいました。
また、行政の出前講座を利用しゴミ焼却場を見学しました。移動バスの中では清里町開拓時代の歴史ビデオを観ました。本州から隣の小清水町にきた農家のお嫁さんの団体『はるな会』の会長が、清里の移住者ネットの活動見学と交流を希望されて参加されました。



3月

地場産小麦を使ったパン作り

昨年に引き続き、地場産小麦を使ったパン作りを町内の加工施設で行いました。今回は若いママさんが主催。

会員で調理師免許の資格がある方に講師をして頂きながら行いました。託児がありましたので交流・親睦が図れました。

今後の予定

今までは移住者ネット内だけの活動でしたが、H&C財団の助成金で町のイベントに積極的に参加出来たり、幅広い活動が行えました。また託児に補填ができ、子育て中の若い人たちも活動がしやすくなり加入者も増えました。

顔を合わせる事もなかった移住者と知り合い、一緒に楽しく活動したり話を聞くことにより、各自が「同じ悩みを持っているのは私一人じゃないのだ！」という大きな支えが出来、発想の転換に繋がりました。そして活動に参加された方からは、清里町から離れてしまう人が現れませんでした。

地域には独自の文化や個性があります。イベントを通して清里町の事が以前よりもわかり、再認識するいい機会になりました。無理のない範囲での集まりと活動を行い、関連機関と連携・協力し、地元のイベントの参加や出店などを行いコミュニケーションの場を絶やさずに活動していきたいです。

移住者ネットがイベントで使う物品は、私たちが使わないときは学校や家族でのイベントに貸し出そうと思います。移住してきた方や移住したい方へ清里町の情報、移住者ネットの活動やお店の宣伝をホームページ等で発信していきたいです。夏には地場産小麦を使った「流しうどん」を考えており、これから企画します。

今春から清里町に『地域づくり協力隊』としてお二人が来られました。その方たちも他府県からいらっしゃった移住者です。頼もしい仲間であり味方ができ、新しい視点で知恵を出し合い協力しながら、ポジティブな行動でもっと楽しく前向きに暮らしていけるように活動していきます。移住者と地元住民が隔たりなく居心地よく共存できる場所づくりを目指して、次世代にも継続させていきたいです。

上:POTATO PARTYの模様
左上:開場前にスタッフで集合写真
左下:清里産の小麦のパン。ふわふわしっとり
右:箱物ツアー

イザベラとひさしの町が蘇る ツインタイムトラベル

特定非営利活動法人 えき・まちネットこまつ［山形県川西町］

団体設立の経緯

地方ローカル線駅が無人化の危機に瀕した時、地元高校生がストップをかけ、その高校生の活動に地元住民が共鳴し設立した本法人は、任意団体の設立から満5歳を迎えます。この間、JR駅業務の有人受託やコミュニティ駅の取り組み、駅を中心にしたまちづくりなど多彩な事業に取り組みながら、駅前通りの高校生チャレンジショップの開店や、空き店舗をリニューアルしたまちなか交流施設の運営など多くの実績を残しています。そのきっかけになったのは、H&C財団より平成22年度に助成を受けた「町民駅を中心にしたまちづくり、ひとづくり事業」であり、この事業で誕生した高校生のまちなか巡りは、全国高校生観光甲子園でグランプリを獲得しました。このように、住民と高校生が手づくりで組織化した団体の地域活動が認められ、平成26年1月には、山形県から特定非営利活動法人設立の認証を受け、法人化が実現しました。

地域概要

川西町は、1955年に小松町など近隣1町5村が合併して誕生し、当時の人口は約30,000人を数えました。しかし、現在では17,000人を切り、高齢化率は35%に近付いています。このように少子高齢化の一途を辿る町勢の中で、当法人が所在する小松地区は、本町の中心部にあり、以前は越後街道や羽州街道、最上川舟運に至る長井街道の要衝および宿場として栄え、活気溢れる地域でしたが、近年は後継世代や商工業者の郊外および町外流出によって、人口や産業の空洞化、空き家や空き店舗の急増が顕著になってきています。このような現状から、当地区では地域活性化やにぎわいのある地域おこしにスポットを当てながら、「地区民に密着した地域づくり」「共に考え参加する地域づくり」「世代間交流と次世代につながる地域づくり」のスローガンを、NPOや農商工業者と共に具現化する事業を展開しています。

設立年月・・・平成 22 年 2 月
法人化した年月・・・平成 26 年 1 月
メンバー数・・・142 名
代表者名・・・理事長　江本一男（えもと・かずお）
連絡先・・・〒999-0121　山形県東置賜郡川西町　大字上小松 1644 番地
☎ 0238-42-2533　eki-mn-7@ms5.omn.ne.jp
http://www5.omn.ne.jp/~eki-mn-7/
団体のミッション・・・私達は地方ローカル線駅の有人化を守りながら、駅を中心としたまちづくりや地域活性化を目的として、事業や活動を行っています。共に学び、共に行動しながら、持続可能な地域を見出すためのアクションを展開しています。

活動に至った理由や背景

団体設立以来、「共感・共生・共創」を活動テーマとして、地域住民と一体化したまちづくりに取り組んできた私たちは、地域資源を掘り起こした事業運営と助成だけに頼らない財政基盤の確立が肝要と考えています。本事業は、本町にある文化および観光資源を繋ぎ合わせ、時空を超えた周年観光プランとして活用しながら、地域の活性化と観光人口の増大をめざし、さらには古道の復元やイザベラの鐘建立によって、新しい観光スポットや交流の場づくりも実現すると考えています。アベノミクス効果が喧伝される昨今ですが、未だ地方は衰退に喘いでいます。また、営々と継承されてきた伝統や技能、慣習も途絶の危機に瀕してもいます。地域の伝統や文化的「いいもの」、即ち宝物をもう一度掘り起こし、空き家や空き店舗の増加という一見マイナス要因とされる現状を地域資産の増大と考え、その活用に知恵を結集する契機とするため助成事業への申請を行い、活動を始めました。

雑木に覆われていた諏訪峠古道を保存会や置賜農業高校生が協力しあって見事に復元した。

活動の内容

諏訪峠古道整備

イザベラバードが旅したといわれる越後街道十三峠の最後の峠であった諏訪峠古道は、古道保存会によって整備されていましたが、近年は会員の高齢化が進み、荒廃し始めていました。今回の活動では、置賜農業高校生と保存会の会員、さらには賛同する住民も協力しあって倒木の伐採や下草の刈り取りに取り組み、古道復元を実現させました。また、頂上付近には見晴らしスペースも完成しました。

5月22日（木）　第1回古道整備/雨天中止
6月12日（木）　第2回古道整備/古道保存会との合同整備
6月19日（木）　第3回古道整備/置賜農業高校生
6月26日（木）　第4回古道整備/置賜農業高校生
7月10日（木）　第5回古道整備/雨天中止（大雨による列車不通）
7月17日（木）　第6回古道整備/置賜農業高校生
8月28日（木）　第7回古道整備/保存会と置賜農業高校生
9月18日（木）　第8回古道整備/保存会と置賜農業高校生
10月2日（木）　第9回古道整備/保存会と置賜農業高校生
10月9日（木）　第10回古道整備/置賜農業高校生

諏訪峠古道保存会例会及び十三峠案内人講座
7月1日（火）　みやまち楽市
9月26日（金）　十三峠案内人講座

1878年、英国女性旅行作家のイザベラ・バードが宿したと記された日本奥地紀行は、本町出身の高梨健吉慶応大学名誉教授が初めて訳した。

イザベラバードの
セカンドタイムトラベル&
スタンプラリー

当初は「ツイントラベル」と称しましたが、金坂清則氏の名称と重なるという意見もあり「セカンドタイムトラベル」に変更したまちなか歩きを実施しました。7月にはトライアル、8月から10月までは高校生がガイドを務めるタイムトラベルを合計3回実施し、高校生の案内役も好評でタイムトラベルを継続して欲しいとの声も聞かれました。また、8月24日～12月7日までは、参加者がスタンプラリーカードを持って9つのチェックポイントを訪ね歩く、「バードとひさしのセカンドタイムトラベルスタンプラリー」を開始しました。350名の応募者があり、実際にスタンプラリーを完成させた方が180名いましたが、まちに関するクイズの正解者は78名でした。

7月12日（土）　トライアル／参加者15名
8月9日（土）　第1回高校生によるスタンプラリー まちなか巡り／40名参加
8月11日（月）　セカンドタイムベルトラスタンプラリーのチェックポイント・カード準備
8月24日（日）～12月7日（日）　セカンドタイムトラベルスタンプラリー
9月20日（土）　第2回高校生によるタイムトラベル まちなか巡り／18名参加
10月12日（日）　第3回高校生によるタイムトラベル まちなか巡り／22名参加

まちなかにある古墳など、まちの宝物を高校生が紹介しながらトラベル&スタンプラリーが続けられた。

イザベラバードの鐘（イザベル）建立

バードが滞在した地であることを知らしめる街中モニュメントを作ろうと考え、イザベラバードの鐘（通称イザベル）の建立に取り組みました。6月23日から工事を開始し、7月1日に取り付け塗装。

7月11日には看板設置とライトアップ工事を終了して、7月12日に除幕式を行いました。当日は川西町長を始め来賓及び関係者25名が参加して、新しい名所の完成を喜びました。また、8月2日からは「イザベル」ライトアップも始まり、地元住民ばかりでなく観光客のみなさんにも大変喜ばれています。意外な効果は、地元の高校生や子ども達が、鐘を鳴らしながら看板に記載された内容を読んで、イザベラバードの滞在地であることを理解してくれたことであります。とても効果的なモニュメントになったと、各方面からの評価もいただきました。

6月23日（月）　工事開始
7月1日（火）　取り付け塗装
7月11日（金）　看板設置・ライトアップ工事
7月12日（土）　除幕式
8月2日（土）　「イザベル」ライトアップ

バードとひさしの

ワイド地域　地域の情報をお寄せください
酒田支社 0234(22)1580
鶴岡支社 0235(22)2810
新庄支社 0233(22)3580
尾花沢支社 0237(22)0165
村山支社 0237(55)2532
東根支社 0237(43)7333
寒河江支社 0237(86)4241

新スポット「バードの鐘」除幕

諏訪峠古道や金子邸

旅した道も巡る

川西　明治時代の山形路を旅した英国人女性旅行家イザベラ・バードの川西町での足跡をたどるまちなか歩きが12日、町内で開かれた。諏訪峠古道などを歩いたほか、JR羽前小松駅東口に新しく完成した「イザベラ・バードの鐘（別称・恋咲くイザベル）」の除幕式も行われた。

NPO法人えき・まちネットこまつと諏訪峠古道保存会が実施した諏訪峠は、バードが上小松村（現川西町上小松）に入るために通った越後米沢街道・十三峠の最終峠。荒れた状態だったため、同保存会と置賜農業高の生徒らがこの日までに、雑草刈りや倒木の撤去などに取り組んだ。

「イザベラ・バードのセカンドタイムトラベル」と題したこの日のイベントには、同校や保存会の会員ら約20人が参加。諏訪峠古道や諏訪神社、宿泊地「金子邸」などバードが旅した道を、同保存会の片倉尚会長代行の案内で巡った。

「恋咲くイザベル」は、バードにちなんだ観光スポットを造ろうと、同NPO法人が「ハウジングアンドコミュニティ財団」の助成を受けて新設。除幕式では、同NPO法人の江本一男理事長が「この鐘をまちなか巡りのスタートゴールにしたい。若い人たちが出会える場所になるといい」とあいさつ。原田俊二町長と置賜農高生らが除幕した。

JR羽前小松駅東口にお目見えした「恋咲くイザベル」　＝川西町

駅前にはイザベラ・バードの鐘も建立されて新しい観光名所になり、イルミネーションも施された。

ふれあいエリア作り

バードとひさしのふれあいエリア作りは、11月3日にイザベル付近に芝桜の定植を行うと共に、11月24日と12月5日には八重桜の移植及び雪囲いを実施しました。

今回の活動は、地元の新聞やケーブルテレビでも取り上げられ大きな話題となりました。また、町主催や他団体主催のまちなか巡りでも、今回のコースが活用され、特に今年4月に実施された井上ひさしさんの吉里吉里忌におけるまちなか巡りでは、100名近くの参加者があり、大変注目を集めました。

11月3日（月）　芝桜の定植
11月24日（月）　八重桜移植準備
12月5日（金）　八重桜移植と雪囲い

活動の成果

少子高齢化や中心市街地の空洞化が進む当地区にあって、歴史的かつ文化的観光資源であるイザベラバードや井上ひさし氏に因んだ所縁の施設を整備し、まちなか巡りの企画を進めることで観光振興や農都交流に貢献することができました。また地元のシンボルとして住民とともに活動することで、観光資源としての重要性を共に認識し、地域コミュニティの連帯と創造、および協働の機運が向上したとおもいます。具体的な効果では、①諏訪峠やイザベラの鐘、ふれあいエリアの復元や整備によって、観光資源としてのつながりや広がりが増しました。②まちなか巡りの発着地を担当者が常駐する駅に置くことで、年間を通した観光イベントが可能になり継続もし易くなりました。③地区内各所に点在している観光資源を結びながら、地区住民の自覚や自信、誇りの涵養に寄与し、保存にもつながりました。そして、諏訪峠古道保存会や小松地区地域振興協議会、さらには置賜農業高校や町観光協会との連携によって、組織的な観光振興や観光資源の保護整備が図られたと思います。

今後は、定期的な観光事業としてセカンドタイムトラベルやスタンプラリーを継続していきたいと考えています。

今後の予定

①「バードとひさしのまちなか歩き」の定番化

今年度も7月と9月にJR東日本の駅長おススメの小さな旅として、「バードとひさしのまちなか歩き」が実施されます。高校生が案内役を務めるこのまちなか歩きを定番化していきます。

②諏訪峠古道頂上へあずま屋整備

置賜農業高校生と共に古道の整備を進める中で、古道への間伐材チップ敷設と頂上へのあずま屋建設を進めていきたいと思います。

③今年度の全国高校生観光プランニングコンテストに「イザベラ・バードの道を旅するツアー」応募

置賜農業高校生が取り組む観光プランニングの実現に連携しながら頑張っていきたいと思います。

福生、米軍ハウスから発信する地域活性プロジェクト

特定非営利活動法人 FLAG［東京都福生市］

団体設立の経緯

NPO FLAGは、東京都の西多摩地区にあり米軍横田基地を有する街「福生（ふっさ）」で60年以上前に建てられた米兵用住居「米軍ハウス」を拠点に、郊外地域だからこそ持ち得る独自の魅力を引き出し東京都心では得られないライフスタイルを定義、発信するための街づくりNPOです。「LOCAL STANDARD/ローカルスタンダード」というコンセプトを掲げ、2013年の春より活動をスタートさせました。団体をスタートさせた2013年に、解体が予定されていた米軍ハウス一戸を自分たちで修復する事で保持することにしました。以降、「米軍ハウス」がローカルで暮らす際のライフスタイルのアイコンとなる様、FLAGの事務所兼イベントスペースとするなど福生での様々な活動の拠点として活用しています。

地域概要

福生は、東京都心から約40kmに位置する東京都の多摩地域にあり、街の約3分の1を占めるアメリカ空軍横田基地で有名なまちです。多摩川など自然にも恵まれた郊外の住宅都市として、また横田基地に面する商業都市として発展して来ましたが、人口は1991年（平成3年）の6万人をピークに減り続け、東京都の中でも人口減少の著しい地域になっています。
市では近年「都市計画マスタープラン」の改定を行い、“福生独自の景観の活用と、福生の顔となる景観づくり”を提言しました。横田基地に沿った国道16号エリアに立ち並ぶ商店で構成された商店街（通称BASESIDE STREET）の国際色溢れた異国情緒のある街並や、米軍ハウスなど歴史のある住宅建物を街の文化財産として見直し、活用する事を進めています。その16号沿いの商店街は、約60年前には、横田基地の米兵をターゲットにした商店が軒を並べていましたが、除々に海外のインポート商品を買い求める日本人へと客層が変化していきました。そして、インターネットの普及などでどこに居ても同じモノが手に入る様になった現在、集客力は一時の勢いを失っています。

設立年月 ･･･2012 年 2 月
法人化した年月 ･･･2013 年 3 月
メンバー数 ･･･10 名
代表者名 ･･･ 佐藤志織（さとう・しおり）
連絡先 ･･･ 〒197-0003　東京都福生市熊川 1068-26　東京ハイツ P-9 号
☎ 042-551-0402　npoflag@gmail.com
http://www.npoflag.com
http://www.facebook.com/NPOFLAG
団体のミッション ･･･NPO FLAG は、東京郊外の米軍横田基地を有する街、福生に残る「米軍ハウス」を拠点に、ローカルが持つ都心にはない独自の魅力を引き出し、新たな価値を「LOCAL STANDARD/ ローカルスタンダード」として提唱する街づくり NPO です。

活動に至った理由や背景

「福生」は横田基地がありアメリカの文化が多く流入した事で、日本に様々なカルチャーを生み出してきた街と言えます。その中でも当時の米兵用住居として造られた“米軍ハウス”は、日本に返還された60年代後半から、異国情緒溢れる景観と安い賃料だったことから若いクリエイターが多く移り住み、70年代以降に様々な文化を生み出す発信基地の役割を担ってきました。しかし、街一面に立ち並んでいた米軍ハウスも築60年以上経った今、取り壊しが進み数百棟を残すのみとなっています。

3.11の震災以降、コミュニティの重要性が全国的に見直されてきた事や、福生の人口減少など街の問題や課題が見えて来ました。こういう時に、今はなくなりつつある米軍ハウスという住空間や、福生という独自の地域性がもたらしてきた住み方/暮らし方を改めて見つめ直し、再定義する事が、都心にはない郊外である福生独自の価値として街の財産になりえるのでは、との思いから街づくりNPOの設立を構想しました。

多角的な活動展開のために、「福生」と「米軍ハウス」だけにとどめず、活動のポイントを農業地域である隣町の瑞穂町にも広げています。

米軍横田基地／第五ゲートと目と鼻の先にFLAGHOUSEがある米軍ハウスエリアがあります。

活動の内容と成果

地域イベントサポート

FLAGでは、福生で行われる様々なカルチャーイベントのサポートを行いました。

①いまここ祭り

2014年4月26 日（土）、27日（日）

食や環境、エコロジーをテーマに東京都多摩川中央公園（のびのび広場）にて開催された「いまここ祭り」の来場者にアンケートを実施。2日間で約50組に対して調査を行いました。また、副理事の田中がイベント当日の司会、進行を担当しました。

右:いまここ祭り
下:バナナハウスパーティ

②バナナハウスパーティ

2014年9月6日（土）、7日（日）

毎回数十万人の来場者を呼んでいる福生のビッグイベントで、横田基地を解放して行われる「友交祭」に合わせ、基地ゲート近くに位置する、FLAGの拠点であるハウス郡のエリアで「バナナハウスパーティ」（副理事/田中主催）を開催しました。FLAGではメンバーである酪農家/清水所有の農地を利用した畑で育てたジャガイモ（男爵/キタアカリ/メイクイーン/インカの目覚め）を使用したポテトフライ「ACE OF POTATO」を提供した他、清水牧場が生産供給する東京牛乳を使用したジェラートのカップアイスを、清水牧場のブランドメイドとして販売しました。

https://www.facebook.com/FussaBananaHouse

③インターナショナルフェア

2014年9月28日（日）

福生市商工会主催の今年で26回目を迎える16号商店街イベント「インターナショナルフェア」。

今回は副理事/田中が企画と運営を担当しました。FLAGでは会場演出のコンセプトイメージの提案や物品提供を行い、当日は飲食ブースとしてBBQグリルで焼いたピザを提供する「ACE OF PIZZA」を出店しました。

https://www.facebook.com/basesidestreet16

FLAG自主企画
「ウェストランド・ポテトファーム」

福生の隣町、瑞穂で酪農業を営み、FLAGメンバーでもある清水の「WESTLAND FARM /清水牧場」の農地を提供いただき、ジャガイモを種付けし生産しました。

①種付け作業
2014年4月8日（火）

ジャガイモ畑をスタートするにあたり、品種を「男爵芋」「メイクイーン」「キタアカリ」「インカの目覚め」の4種用意し、種付けを行いました。

②POTATO HARVEST PARTY
2014年7月6日（日）

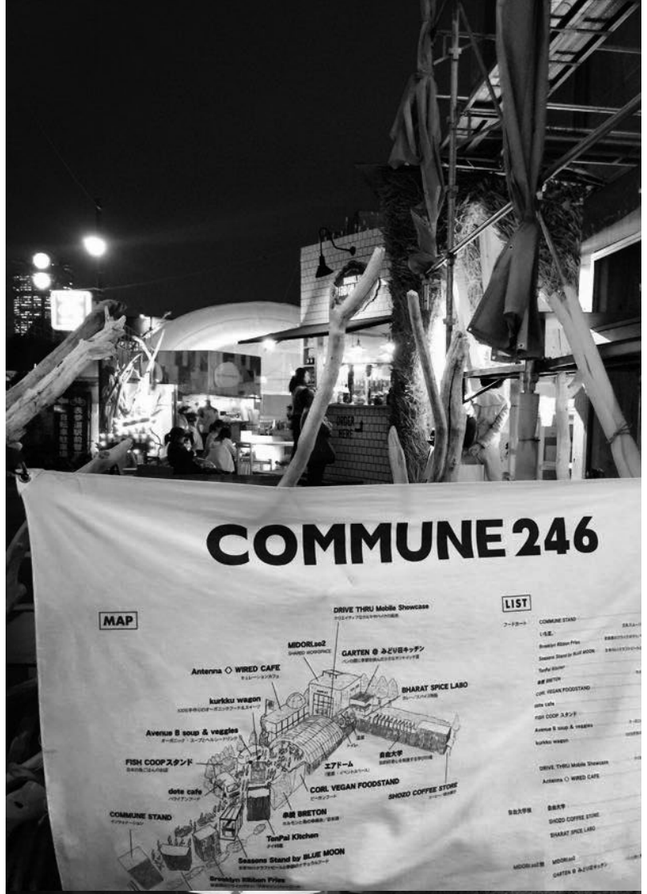
収穫時には参加者を募り、収穫祭イベントを実施しました。収穫後は、穫れたてのジャガイモをその場でベイクドポテトにして参加者に提供しました。

③福生飲食業者と試作/試食会
2014年8月4日（月）

穫れたジャガイモの活用方法を、福生～都内で飲食店を経営する「タルタルジャパン」斉藤氏に相談を持ちかけました。トルコのB級グルメ「クンピル」などをご提案頂き、試作、試食会などを行う事で活用方法の可能性を探りました。

④福生のイベントで提供
2014年9月6日（土）、7日（日）

地域イベントサポートの項でも触れましたが、穫れたジャガイモを使用したポテトフライを「バナナハウスパーティ」で提供販売。ファンドレイジングに繋げました。



米軍ハウス関連活動
FLAG 企画

米軍ハウスとそのライフスタイルを広く伝えるために、メディアとの連携や、独自の事業、イベントなど様々な施策を行いました。

① SAYAMA HOUSE
リーシングサポート

2014 年 6 月〜

米軍ハウスをハード的側面から捉え、実際に建築まで出来るFLAGの建築部門として立ち上げたDependent Housing Engineer Section（副理事/若林）が施工を担当し、2014年に完成した米軍ハウスのリプロダクト「SAYAMA HOUSE /サヤマハウス」。

FLAGでは完成後のリーシングやメディアへの露出など、情報発信の面でもサポートを行いR-STOREやLIVESなど様々なメディアで取り上げていただく事で、多くの反響がありました。

②撮影スタジオ／レンタルスペース運用

2014 年 4 月〜

米軍ハウスを撮影スタジオとして活用したレンタルスペース事業を試験的にスタートさせ、アパレル雑誌の撮影や、TVの撮影に使用していただく事で、ファンドレイジングに繋げました。

雑誌:男性向けファッション/ライフスタイルマガジン　2nd（セカンド）2014年4 月

雑誌:男性向けファッションマガジン　WOOFIN'（ウーフィン）2014年7 月

TV:「あなたの知るかもしれない世界」再現ドラマ　2015 年 1 月

③トークショー
" 米軍ハウスとコミューンとは "
LOCAL STANDARD を考えよう。

2015 年 4 月 16 日（木）

青山のCOMMUNE246 /コミューン246内のWIRD CAFE（ワイアードカフェ）でJCDのサポートの下、開催。FLAGの活動と米軍ハウスの魅力についてトークショー形式で紹介しました。

まだ米軍ハウスを実際に体感した事のない都内の方々に、ローカルの魅力を感じ取っていただきました。定員40名の限定イベントでしたが、多くの問い合わせがあり、改めて米軍ハウスの注目度を再確認しました。

④ワークショップ
LOCAL STANDARD COLLEGE

2015 年 5 月 5 日（水）

米軍ハウスに関するトークショー形式のワークショップと、ライフスタイルを体感してもらう為のケータリング形式のBBQの2部構成で“LOCAL STANDARD TALK 2015”と題したイベントを開催しました。トークショー形式のワークショップではプロジェクタで米軍ハウスの歴史、時代ごとに意味合いを変えて行く存在の変貌から、日本の文化にどの様に影響を与えてきたかなどを解説し、実際に今そこに暮らす人たちの生の声を紹介しました。BBQケータリングではそのライフスタイルを体感してもらう為、参加者自らが火をおこす所からスタート。福生で当時流れていたであろう音楽や、福生にゆかりのある音楽を楽しみながら、米軍ハウスでの生活や空気感を体感してもらいました。

今後の予定

FLAGの活動拠点である福生の隣町、農業が盛んな瑞穂町で農業を営んでいる若い世代の農家さんたちと連携したファーマーズマーケットを企画中。今年の3月にオープンした昭島モリパークアウトドアビレッジ内のクライミング・ヨガスタジオ＆オーガニックカフェ『PLAY』とのコラボレーションにより、6月末より同施設内で“GO TO LOCAL MARKETS”を企画運営。毎月、第2、第4週の土日の定期開催を予定しています。

今後は、モリパークアウトドアビレッジ内の飲食店への瑞穂野菜の卸しなども計画中で、東京在住の方にもあまり知られていない西多摩の農産物を広く知らせて行きたいと考えています。

また、米軍ハウスでのライフスタイルを体感しながら、瑞穂で農業体験が出来るワークショップを企画中。福生と瑞穂それぞれの持つコンテンツ力を活かした施策を打ち出して行きます。

豪商の館「機那サフラン酒本舗」の保全の為の地域活性化活動

特定非営利活動法人 醸造の町摂田屋町おこしの会［新潟県長岡市］

団体設立の経緯

地域に生活する者にとっては当たり前の空間なのでしょうが、外から来た人にとって摂田屋はとても魅力的です。平成15（2003）年、当時のJR長岡駅駅長の助言もあり、地域の魅力的な資源を有効活用してまちおこしをしようという機運が盛り上ってきました。ところが平成16（2004）年、新潟県中越地震が起き、この地域にも大きな被害をもたらしました。中でも蔵造りの建物は再生が困難で、費用もかさむため存亡の危機を迎えました。このままではせっかくの景観が無くなってしまう。これではいけないと醸造業者を中心にして、地域や摂田屋を愛する市内の有志が集まり、歴史的建造物や景観を有効活用しながら地域を活性化させようと、2005年にNPO法人の設立に至りました。

地域概要

長岡市南部に位置する摂田屋地区は、江戸時代から酒・味噌・醤油などの醸造業が集積した醸造の町であり、脇往還の一つ旧三国街道が町のほぼ中央を通っています。長岡市の市街地の多くは太平洋戦争で焼失しましたが、摂田屋地区は危うく難を逃れ、明治・大正時代の面影を残す景観があります。古くから交通の要衝としても栄え、戦国時代には城が築かれ、酒造りもこの頃から始まったとされています。戊辰戦争の時に長岡藩の本陣がおかれた光福寺もここにあります。明治から昭和にかけ薬酒で一世を風靡した機那サフラン酒本舗が、鏝絵の蔵に代表される異彩を放つ個性的な建物を建造しました。現在、地区では7件の建造物が有形登録文化財に指定されており、歴史的建造物と景観で散策を楽しむ人が増加しています。

設立年月 ・・・ 平成 17 年 8 月
法人化した年月 ・・・ 平成 18 年 1 月
メンバー数 ・・・ 正会員 30 人
代表者名 ・・・ 中村　隆（なかむら・たかし）
連絡先 ・・・ 〒940-1105　新潟県長岡市摂田屋 4 丁目 8 番 16 号
☎ 0258-35-3000　settaya@yosinogawa.co.jp
http://kina-saffron.com/
https://www.facebook.com/#!/nnn.settaya
団体のミッション ・・・ 私達は、 個性豊かで創造的な活力のある地域社会づくりに寄与することを目的とし、
長岡市摂田屋地域を中心とした構成員相互の協力と資源の相互活用を通じて、
町づくりや地域おこしの事業を行っています。

活動に至った理由や背景

地域の中核的建物「機那サフラン酒本舗」は主屋・離れ座敷・庭園が建設から100年以上が経過し荒廃が進んでいます。保存のために残された時間は多くありません。しかし修復するには巨額の費用がかかり、待っているだけでは貴重な文化財は無くなってしまいます。私達は未だあまり知られてはいない、とても魅力的な稀代の文化財を守るためにできること、草取りから始めました。朽ちる速度を可能な限り遅らせる処置を行い、できるだけ可視範囲を広げ、大勢の方からご覧いただけたら、おのずと保存すべきものか否かを判断していただけると思っています。

活動の内容と成果

市民の財産として組織的に機那サフラン酒本舗を保存・活用していくために、2013年に「機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会」を結成しました。会長からの指示はできるだけ多く会合を行うこと。月1回が目標でしたが現在隔月に1回のペースで会議を行なっています。目的を遂げるためには多くの困難が存在しますが、皆が集まり情報を持ち寄り、意見を交わします。活動をどのように進めるか、行政との連携は、資金調達は、将来の姿は、いろんなことが議論され、それぞれが本舗の魅力を語り、交流を深めています。

本舗の保存活動のスタートは2009年のボランティアの草取り。近所の造園屋の社長さんの発案にNPOが呼応し、地元住民に呼び掛けて長岡造形大学の学生さんと一緒に始めたのです。午前中の作業で汗を流した後はお汁とお酒、おにぎりで交流会というパターンは今も変わりません。雑草が生い茂り木々には蔦が絡まりジャングルのようだった庭が、スタートから6年経過した今、ずいぶん奥まで皆様にご覧いただけるようなりました。

ボランティアの活躍は庭園に留まりませんでした。2012年、日本一と呼び声の高い本舗の大看板が修復され、新装なった長岡市の表玄関に飾られ、その雄姿と精緻な彫刻は市民の目を楽しませましたが、5カ月の展示が終わった時、高さ12mの看板は行き場所を失いました。長岡市も保管場所を探してくれましたが、いずれの施設にもこの巨大看板を入れるだけの入り口がありません。そこで本舗の使っていない土蔵に分解して納めることになりましたが、ここには「鍛絵蔵」を修復するとき移された大量の段ボールの山があったのです。この時からボランティアの屋内清掃が始まりました。

本舗の内側も大変荒れていましたが、見るものすべて驚きの連続でした。庭と同じく、いつか皆に見せたいという願いが生じたのは言うまでもありません。2013年、離れ座敷の二階の片付け後、初の一般公開を行い、昨年は一階も公開することができました。更に正面入り口から道具蔵に通ずる通路を片付けて通行を可能にし、大看板の公開も正面から案内することができるようになりました。主屋の一部も手を付け始めています。

本舗の魅力を伝えるには、実際に大勢の方にお越しいただき見ていただくことが一番です。そのために昨年は3回の一般開放を行いました。毎年4月には向かい

けっこう大変な作業です。みんなが一生懸命になれるのは夢に近づくのが実感できるから。振り返ると前回よりさらにステキな空間になっている。

にある吉乃川が「蔵開放」を行なっています。この年これに摂田屋の蔵元が歩調を併せ開放する「摂田屋開放」の実施となったわけです。本舗の来場数は確認できませんが、実施のアンケートでは、保存への熱いメッセージをたくさんいただきました。

私達の最終的な目標は、修復と地域や市民のための活用です。ただそこまでどのくらいの日数がかかるかは分かりません。できることは可能な限り良好な状態を保つこと、これ以上朽ちるのを防ぐことです。

6月に樹木の下枝伐採と灯篭積み直し、離れ座敷の雨漏り防止工事を行いました。永らく手入れが無かったため、木が弱っており岩の上に育った木の根が張ると岩山の倒壊につながりかねません。灯篭も中越地震で倒伏したままになっているものが、数多く残っていました。離れ座敷は雨漏りをしていたり、瓦が落ちて危険な場所が数か所あり、ここを手当てすることが何よりも優先されます。ただ工事にはお金がかかる為、寄付金の集まり具合をみて着工しました。

情報発信も大切なことです。私達の目的を多くの方に伝えるためにも、イベントは重要だと考えています。未だ活用できる状態ではなかったかもしれませんが、離れ座敷と庭園の工事が終了すると、2つのイベントを実施しました。

伝統芸能のイベントでは、狂言のワークショップを長岡で開催する団体から、本舗での開催も可能だという話をいただき、即決定の返事を致しました。素晴らしい床の間と金の襖をバックに一流の狂言師の講和と演技、参加者が一体となったワークショップには参加者も大変満足をされたようです。

もう一つはSecret Garden Concert。市内で活躍するアーティストに集まっていただき、音楽のイベントにチャレンジしました。日中は庭園と離れ座敷の公開、夕方からはライトアップとコンサートというプログラムです。琴、バイオリン、フルートの奏者は思い思いに、本舗のイメージに合わせた曲を奏でました。「機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会」会長からのメッセージの後、暗がりの庭園に200個の豆電球が点灯され、幻想的な風景のなかコンサートは続き、フィナーレはジュピターです。この曲は復興を願う長岡花火フェニックスのテーマ曲でもあり、鏝絵の蔵に描かれた鳳凰(不死鳥)に通ずるもので、思いが込められた熱唱を聞きながら、感動のうちにイベントは終了しました。残念なことは、何人集まるか予想がつかず、混乱を避けるためにご案内は一部にしかできなかったことです。したがってコンサートの様子はYouTubeにアップして皆様に伝わるようにしました。将来本舗はどのような使い方が可能か検証する意味でも、意味のあるイベントでした。

摂田屋の機那サフラン酒本舗

来月、初ライトアップ

有志団体が助っ人募集

長岡市摂田屋地区にある「機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会」は7月5日、機那サフラン酒本舗のライトアップイベントを初めて開く。国登録有形文化財の鏝絵(こてえ)の蔵を投光器で照らすほか、離れ座敷と庭園を開放して無料コンサートを企画する。市民の会は、当日の準備や来場者の誘導などを担うボランティアスタッフを募集している。

機那サフラン酒本舗は、戦前の摂田屋地区を代表する豪勢な建物と評されている。市民の会がまちづくりの拠点として保存を目指している。立派な屋敷を多くの人に知ってもらおうと、初めてライトアップイベントを企画した。

離れ座敷の見学は午後3時半～同5時。コンサートは午後5時半からで市民演奏家がフルートやバイオリンなどを奏でる。ライトアップは午後7時から1時間行う。投光器で鏝絵の蔵と離れ座敷を照らし、約150個の明かりで庭園と庭園内の石灯籠を浮かび上がらせる。

14日は、市民の会のメンバーや摂田屋のまちづくりに取り組む長岡造形大生のグループ「摂田屋こへび隊」らが集まり、投光器の位置を確認するなど予行演習に励んだ。摂田屋こへび隊長の福原優さん(21)は「昔ながらの貴重な建物を地域外の人にも見てほしい」と話す。

建物は老朽化で傷みが激しいため、市民の会は修復に向けた寄付も募っている。また、機那サフラン酒本舗は駐車場がないため、イベント参加には公共交通機関を利用するよう呼び掛けている。JR宮内駅から徒歩10分。

ボランティア、寄付の問い合わせは市民の会、080(5936)4093。メールアドレスは、settaya@yosinogawa.co.jp

ライトアップイベントに向けてライトの設置角度などを確認する市民の会のメンバーら=14日、長岡市摂田屋4

豪華な舞台で狂言堪能

機那サフラン酒本舗 初の一般利用

長岡市摂田屋地区の機那サフラン酒本舗で4日、市民団体が企画する狂言のワークショップが開かれた。床柱に皮付きの桜を使うなど豪華な造りの離れ座敷を会場に、市民約30人が古典芸能に親しんだ。機那サフラン酒本舗が一般利用されるのは初めて。

ワークショップは市民団体「長岡舞台芸術愛好会」が主催した。京都から招いた狂言師の松本薫さんが講師を務めた。参加者は約1時間、狂言の笑い方や扇子の使い方を学んだ。

参加した長岡市の高田忍さん(65)は「狂言の話を楽しく聞き、立派な屋敷に驚いた」と話していた。

長岡舞台芸術愛好会は「建物を見に来た人にも、狂言や愛好会のことを知ってもらえた。相乗効果があった」とする。「機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会」は、離れ座敷の利用団体を随時受け付けている。平沢政明事務局長は「保存に向けて協力してくれる団体を求めている」と話している。

問い合わせは市民の会、0258(35)3000。

機那サフラン酒本舗で開かれた狂言のワークショップ=4日、長岡市摂田屋4

長岡・機那サフラン酒本舗

名物の大看板 2年ぶり公開

あす「摂田屋市」

長岡市摂田屋地区の機那サフラン酒本舗にかつて立てられていた築100年余の大看板=写真=が4日、2年ぶりに同本舗で公開される。高さ約12㍍で装飾を施した看板は全国でも類を見ないといわれている。横に倒した状態で展示するため、間近に見ることができる。

公開は、地元のNPO法人「醸造の町摂田屋町おこしの会」が同日開催する「おっここ摂田屋市」の一環。大看板は1911年に立てられ、竜や獅子などの彫刻が施されている。修復を経て2012年には約半年間アオーレ長岡に展示されたが、撤去後は機那サフラン酒本舗の土蔵に保管されていた。

摂田屋市では、機那サフラン酒本舗の離れ座敷や庭も公開する。このほか、摂田屋地区内にある五つの醸造所でも酒の試飲や工場見学などを企画している。

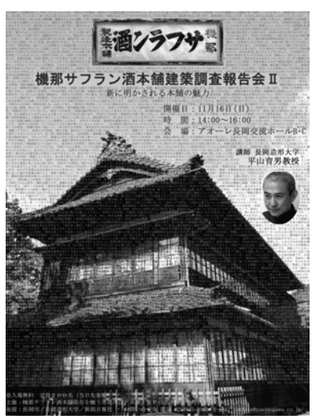
会場には駐車場がないため、町おこしの会は電車やバスの利用を呼び掛けている。問い合わせ同会、0258(35)3000。

10月には当会一番のイベント「おっここ摂田屋市」が開催されます。これは中越地震の復興を祈念して始まったもので、昨年で10回を迎えました。本舗も初回から会場の一つとして多様な試みを行なってきました。2008年鏝絵蔵が修復を終え、2009年から草取りを開始して2012年にはついに庭園の一般開放を達成しました。その後は公開範囲を年々拡大しながら、本舗の姿をお伝えしています。昨年は「鏝絵蔵」「庭園」「離れ座敷」「道具蔵」（大看板を展示）を公開しました。この日、本舗を訪れたのは1,613人、市内外から大勢の人が集まりました。入口付近では地元小学生が作った風鈴の音で来訪者を迎え、ボランティアが整備した通路を通って大看板展示の蔵まで誘導しました。大看板は2年ぶりの公開です。庭園に回った人達は溶岩でできた岩山などの説明を受けた後、離れ座敷へ向かいました。ケヤキ板の廊下、座敷の床柱など今ではとても手に入らない建材の数々にため息をもらしました。出口ではアンケートが行われ、313人から回答をいただき、その内200人から熱いコメントをいただきました。私達の活動への支持や自治体が支援すべきだ等の内容のものも多く、これらの期待や激励にしっかり応えなくてはならないと感じております。

11月には2回目の建築調査報告会が市内中心部のホールでおこなわれ、100名の聴衆を前に新たに判明した本舗の魅力が語られました。昔の新聞記事や広告をもとに、創業者の人となりや事業展開、建造物や作品に込められた意味を紐解いたもので、本舗の魅力はまだまだ未知数です。多角的に調査が進めば、新事実と共にその価値はさらに増幅されることが予感されるものでした。

降雪直前の12月には主屋と道具蔵の雨漏り補修工事を行い、春までは次年度の準備期間です。摂田屋地域の街並み整備事業も少しずつ、目に見える形で進行してきています。9月にはJR東日本の冊子「トランヴェール」で紹介されたこともあり、県外から摂田屋を訪れる方は一段と数を増しています。地元での関心も高まりを見せ、市議団、会議所、ライオンズクラブ、建築士協会などの団体見学が頻繁に行われるようになり、新たなステップに移行できる日が早く来ることを期待しています。

「秘密の庭園音楽会」。機那サフラン酒本舗とこのイベントにピッタリのタイトルでした。



今後の予定

着実に進展しているという手ごたえを感じる一方で、計画には未達のものも多くあります。目標達成には時間がかかり、活動を持続するパワーが必要だと感じています。募金は目標額には大きく届いていません。資金が枯渇すれば思うような活動もできないことを考えれば、集め方や発信の方法について検討し新たな策を講じる必要があります。

アンケートでは保存を支持する熱いメッセージを沢山得られました。その中には行政の積極的なかかわりを求めるご意見も複数ありました。昨年は市議団の見学もありましたが、そろそろ行政を巻き込んだ形で活動を展開してゆく時期であり、連携しながら地域の宝を守る方法を模索します。

この後は屋敷内に残された荒れ放題の場所を少しずつ整備すると共に、通年公開に向けて準備を行なってゆきます。そのために見学者や公開スタッフのための休憩所の整備を行います。主屋入口付近を片付け、間仕切りをして椅子テーブルを置くだけの簡易な形からのスタートです。部屋ができたら可能な限り土日公開を行なってゆくつもりです。保存を進めてゆくには本舗がどのような所なのか、何が貴重なのかを実際に見ていただくことが、一番有効な手段だと思っているからです。

本舗の有効利用も大きな課題です。離れ座敷には使えるトイレや流しがなく、庭を迂回してかなり離れた棟にあるトイレを使うしかありませんでした。そこで来期は離れ座敷にトイレと流しを作り、活用できる環境を整備します。

私達の活動にはボランティアの力が欠かせません。このパワーと地域や大学、市民ネットワークを拡大しながら活動を展開し、貴重な文化財の保存と地域活性化に努めてゆきたいと思います。

伝統地場産業「アブラギリ」を核とした里山再生プロジェクト

特定非営利活動法人 WACおばま［福井県小浜市］

団体設立の経緯

WACおばまは、平成16年6月にオープンした「小浜市ボランティア・市民活動交流センター」に参集した市内NPO法人・任意団体の運営協議会としてスタートしました。
その後、平成18年にNPO法人格の認証を受け、まちづくり・子ども健全育成・中間支援を主な活動内容として、小浜市内外の各種団体・行政・企業商店街等と協働で様々な活性化事業に取り組んでいます。
まちづくり活動としては、NPOボランティア団体・社会福祉団体・地域団体・行政・企業などと広く連携し、中心市街地活性化・歴史文化保全活用・里地里山活性化などをテーマに、年数回のイベントを開催したり、会議体を作って活動のあり方について議論をしたりしています。
子ども健全育成としては、夏休みにおける理科体験教室（天体観測、化石採取）などを実施しています。
また中間支援としては、市内を中心に県内全域でのNPOボランティア活動のアドバイス等を行政と連携して行っています。

地域概要

福井県小浜市は、福井県南西部にある人口3万人程度の小都市です。古来より京都・奈良との結びつきが強く、「御食国（みけつくに）」と呼ばれる食材提供地であるとともに、仏教伝来初期の寺院等が神仏混淆を残して現存し、さらに江戸時代の古い町並みや祭礼もよく保存されており、国宝・重要文化財をはじめとした文化財が多くあります。
本活動地域である小浜市上根（かみねごり）来地区は、かつて小浜から京都へ鯖を運んだ「鯖街道」沿い、遠敷（おにゅう）川上流の滋賀県との県境近くにあり、小浜市街地から車で30分、標高300mほどの山間小集落です。
かつては炭焼き・アブラギリ（種を圧搾して桐油を取る）を主産業とし、人口は最大300人を数えました。石油輸入に伴いこれらの産業が廃れてからは植林を進めましたが外材輸入増加とともにこれも廃れ、昭和末期には畜産団地を運営したものの牛肉自由化とともにこれも廃業せざるをえなくなりました。
このように山奥の小集落でありながら国際経済に翻弄された上根来集落には、現在居住者は実質ゼロで、すべてが空き家になっています。

設立年月 ･･･2004 年 6 月
法人化した年月 ･･･2006 年 8 月
メンバー数 ･･･16 人
代表者名 ･･･ 鳥居直也（とりい・なおや）
連絡先 ･･･〒917-0078　福井県小浜市大手町 5-31
小浜市中央公民館　小浜市ボランティア・市民活動交流センター内
☎ 0770-53-2456　apec@arrow.ocn.ne.jp
団体のミッション ･･･ 福井県小浜市の市民・各種団体と連携し、地域づくりのため、まちづくり・子どもの健全育成・科学技術の発展・社会福祉の増進および他団体の支援を行うことを目的として活動しています。

活動に至った理由や背景

今では無住になってしまった上根来ですが、その一方で、元住民の多くは遠敷川下流地域に移転し、車で20分程度かければ上根来集落に来ることができます。

このため、上根来に残る自宅の維持管理や畑仕事、集落内の清掃活動や法事などの年中行事の一部が現在でも維持されており、無住なのに地域コミュニティが残っているという、ユニークな地域です。集落内の道路も老朽化しておらず、まだ十分使える家屋も多く残っています。さらに畜産団地跡は屋根つきの広いオープンスペースになっており、様々な活動の場としても活用可能です。

このように地域資源がまだ残っている一方で、上記活動の主要メンバーは50代～70代であり、その次世代は上根来で生まれ育っていないため、「この活動も自分たちの世代で終わり」というさみしい言葉も聞かれます。

こうした実態を知るに至り、この自然豊かな地をこのまま荒れ果てさせてしまうのはしのびない、まだ活動しているメンバーがいる今が最後のチャンスだと考え、平成23年から里山再生への取り組みを模索してきました。

活動の内容

上根来地域の里山再生を目指し、地元住民・地域まちづくり委員会・森林組合・地元産業高校などと連携して平成23年度から開始した「上根来プロジェクト」は

①里山トレッキングなどの自然体験型観光

②自然素材を活用した伝統的工法による治山

③今も自生するアブラギリを活用した地場産業再生

から成りますが、本活動はこのうち③を引き継ぎ、さらに発展させるとともに、②の活動も継続するとともに①についても波及を狙うもので、特に③についてはアブラギリの様々な部位の多面的活用策を探ろうとしたものです。

具体的には、以下の3つの取り組みを行いました。

①桐油圧搾

ーアブラギリの実を採取し、種を取り出して圧搾して桐油を収穫する

畜産団地跡の密集箇所を中心に、実の採取を効率的に行えるよう収集用ネットを設置しました。しかし26年度はたまたまアブラギリの大不作年に当たってしまい、実がほとんどつかず、実の採取はできませんでした。このため、25年度に収集しストックしてあった実を使うこととし、種の処理技術の効率化を進めました。

（7～9月） アブラギリの実は10月に落ちるため、効率的な実の収集を目的として、実の多いアブラギリの下にネットを張りました。冬季積雪量が2mを超えることもあるため、簡単に撤去できる構造としました。

（10月） 実の収集を始めましたが、ネット設置箇所はもとより、遠敷川流域全体で実の中身がすべて空であることがわかり、やむなく今年度は収集を中止し、過年度収集済みの実を使うこととしました。

（11月） 和傘の撥水剤という本来の桐油活用に挑戦してみることとし、安価な和傘をネットで購入し、高校生が構造を調べた上で紙をはがし、伝統工芸「若狭和紙」の和紙を貼って桐油を塗りました。

アブラギリは日当たりのよい裸地に先駆植物としてびっしり茂ります。10月ごろ黒く熟した実が大量に落ちますが、これを左の写真のようなネットで集めます。

アブラギリの実

②葉寿司

ーアブラギリの葉を使った「葉寿司」を開発し、商品化を探る

小浜市特産の「へしこ」(鯖の糠漬け)を使った葉寿司を考案し、へしこも昔ながらの作り方で漬けたものを「究極のへしこ」として市民参加で製作して使うことで、付加価値の倍加を狙いました。

市内飲食業者の協力をいただき、単品の葉寿司ではなく、これを含めた「葉寿司弁当」を開発し、12月に開催した里山シンポジウムでお披露目したところ参加市民に好評を博しました。

(6～8月) 葉を1,000枚あまり採取し、ストッカー(冷凍庫)に保存しました。同時に市内業者とともに「葉寿司弁当」を考案し、試作品を作りました。

(9～11月) 葉寿司弁当が完成形になりました。

(12月) 里山シンポジウムの前日、昨年漬けた「へしこ」を取り出し、寿司を作りました。そして里山シンポジウム当日、葉寿司弁当を披露し、参加市民にふるまい、意見をいただきました。「このまま売れる」など好評でした。

③キノコ栽培

ーアブラギリの幹を榾木にしたキノコ栽培の可能性を探る

平成24年度に幹を輪切りにして菌をオガクズに混ぜたものを挟み込む「短木断面栽培」を実施して成功を収めました。

25年度には本格的な種駒打ちによる植菌を行いましたが、発生が振るわず、この手法は実用的ではないことがわかりました。

そこで26年度は再び短木断面栽培に回帰し、市民とともに植菌しました。産業化できるような量産がむずかしいことがわかったので、今後は短木断面栽培により、里山体験コンテンツのひとつとしていくことを考えています。

(4～9月) 25年度に植菌したキノコの発生状況を、若狭東高校と小浜市加斗地区でモニターしていましたが全般に発生が悪く、駒打ち植菌はアブラギリでのキノコ栽培には適さず、24年度に実施した短木断面栽培が最適であるという結論に至ったため、ここで栽培は中断しました。

(12月) アブラギリシンポジウムの一週間前に榾木(短木断面栽培)にするための原木採取を行いました。20本ほどを伐採し、これから100本あまりの原木を作りました。

里山シンポジウム

上記の活動成果の市民にたいする披露・PRの場として、12月に若狭東高校で「里山シンポジウム」を開催し、60人ほどの市民参加を得て高校生の発表を中心に活動PRを行うとともに、意見交換を行いました。

24年度・25年度と開催してきた「アブラギリシンポジウム」を発展させ、上根来里山再生だけでなく、若狭東高校が取り組む様々な活動も加えた幅広い里山再生につながる活動を紹介するものです。

まず高校性がこれまでの活動内容を発表し、そのあと若狭東高校の様々な取り組みを紹介、昼食は葉寿司弁当を中心に過年度冷凍しておいたキノコ料理なども試食、午後は桐油圧搾見学・体験とキノコ植菌があり、参加者は自分が植菌した榾木を持ち帰りました。

高校生によるしがらみ組みの施工

伝統的工法による治山としては、木杭と竹を使った「しがら組み」の製作を、若狭東高校産業技術課の実習授業の一環として3年間続けており、26年度も上根来地区住民の協力を得て市道沿い斜面法尻に施工しました。治山硬化としては微々たるものですが、これもまた上根来里山再生のシンボリックなもののひとつになっていくと期待しています。

ゲストハウス整備

上記活動拠点としてゲストハウスを整備しました。上根来集落内に空き家をご提供いただける住民がおられたため、これをお借りして、休憩・食事・宿泊ができる施設として営繕を行い、家族3組などの宿泊をいただいています。

(4～7月) 老朽化部分修理などの営繕を行いました。

(8～10月) 家族連れ3組など、のべ6グループに宿泊してもらい、意見を聞きました。

関連イベント参加

12月20日、小浜市内で開催された「自然フォーラム」にて葉寿司やしがら組みの紹介展示を行いました。

また3月29日には、市内で開催された自然体験イベント「エコエコ自然楽校」でも葉寿司やしがら組みを紹介するとともに、希望者に対して上根来見学ツアーを実施しました。

その他

平成27年1月24日、日本技術士会社会貢献事例発表会における発表団体にお選びいただき、しがら組みを中心とした上根来里山再生プロジェクトの取り組みを紹介しました。

また2月13日には「低炭素杯2015」のファイナリストに選ばれ、東京ビッグサイトにて取り組み全般を発表し、「オーディエンス賞」をいただきました。

高校生と一緒にしがら組みを製作中。杉の丸太をカケヤで打ち込み、縦に裂いた竹を編み込んだ完全人力施工の簡易土留柵です。

杉のくいと竹で土留め

若狭東高生 伝統の工法を学ぶ

小浜市の若狭東高校産業技術科建設コースの三年生十二人が三十日、同市上根来の山中で、「しがら組み」と呼ぶ杉のくいと竹を使った伝統的な土留め工法を学んだ。

山の斜面に等間隔でくいを打ち込み、長さ五㌢、幅十㌢ほどの割り竹を、くいの前後に編み込むようにして下から上へと並べ、仕上げていく。

土木現場ではコンクリートブロックを積み上げて土留めするのが主流で、ほとんど使うことはないものの、杉や竹が朽ちても、くぎを使っていないため自然にやさしい工法とされる。

現場は旧上根来小学校に近い道路沿い。地元の要請を受け、約四十㍍の区間を対象にした。杉は、生徒たちが切り出した間伐材。竹は近くのやぶから調達し材料費はゼロという。

高浜町内の建設会社に就職が決まった千田龍聖君は「初めて取り組む工法。くい打ちが重労働だった。学んだことを就職先で生かしたい」と話していた。

（池上浩幸）

割った竹をくいに絡ませながら並べる生徒たち＝小浜市上根来で

活動の成果

桐油圧搾ー圧搾技術は工夫を重ね、ほぼ完成したと考えています。活用先は、当初考えていた「自然素材のニス」は臭いの問題などがあって難しいので、和紙（特産品の若狭和紙）とのコラボレーションによる付加価値化に取り組んでいます。

葉寿司ー商品化できる品質になったとレストラン業者さんや市民の方々からも評価をいただきました。あとは日持ちの問題があるものの、随時商品化していけると考えています。

キノコ栽培ー短木断面栽培で、一般市民にも簡単に榾木が作れることがわかりましたので、里山体験コンテンツに加えられると考えています。

全体としてーこれまでの活動で、アブラギリが一定の付加価値商品を作り出せる可能性が十分あることがわかってきました。

地域産業として生活を支えるほどではないにせよ、地区住民の皆さんが比較的近傍に居住しておられることから、現実的な目標として、上根来を仕事場として高齢者の小遣い稼ぎ程度の段階からスタートさせることがいいのではないかと考えています。

また、若狭東高校産業科との協働の中で、卒業後地元に残り、我々の活動に参加してくれる子が出るなど、互いの絆を深めつつあると感じています。

今後の予定

桐油圧搾ー圧搾技術はおおむね確立でき、また用途としても特産品・若狭和紙に耐水浸透性塗料として使用して日用品（コースターなど）や屋外装飾品、付加価値のある和傘などへの活用などについて業者さんとの協議を進めています。付加価値製品として期待できる和傘については製造技術が小浜市では喪失してしまっているので、京都市の業者とのコラボも視野に入れています。

葉寿司ー葉寿司弁当はひとまずの完成をみたので、今後は「究極のへしこ」の付加価値製品化を進め、さらに26年度から上根来地区で開始した「雪室プロジェクト」との連携も図ることで、さらに付加価値をつけていきたいと思います。

25年度以降、小浜市内で食の新製品開発に取り組んでいるグループとの協働を行っていますが、これは今後も続けていく予定です。

キノコ栽培ーキノコ栽培自体は産業化が難しいことがわかりましたので、里山体験コンテンツの一部として、小規模に継続していきたいと思っています。

上根来全体としてーゲストハウスを拠点とした里山散策・トレッキング・登山・渓流釣りなどの自然体験の場としての整備に取り組んでいます。すでに累計10組のグループの宿泊もいただいており、今後は休憩施設としての利用も含めてさらに活用していきたいと考えています。

畜産団地跡にて「雪室」事業を開始しています。付加価値食材が確保できるとともに、初夏まで雪が残ることもわかってきたので、これもまた里山体験のひとつのコンテンツにできるのではないかと検討中です。

アブラギリ関係と雪室、そしてゲストハウスを中心とした自然体験活動を主なテーマとして、一定の収入が得られるようになることが最終的な目標です。

加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修

加子母むらづくり協議会［岐阜県中津川市］

団体設立の経緯

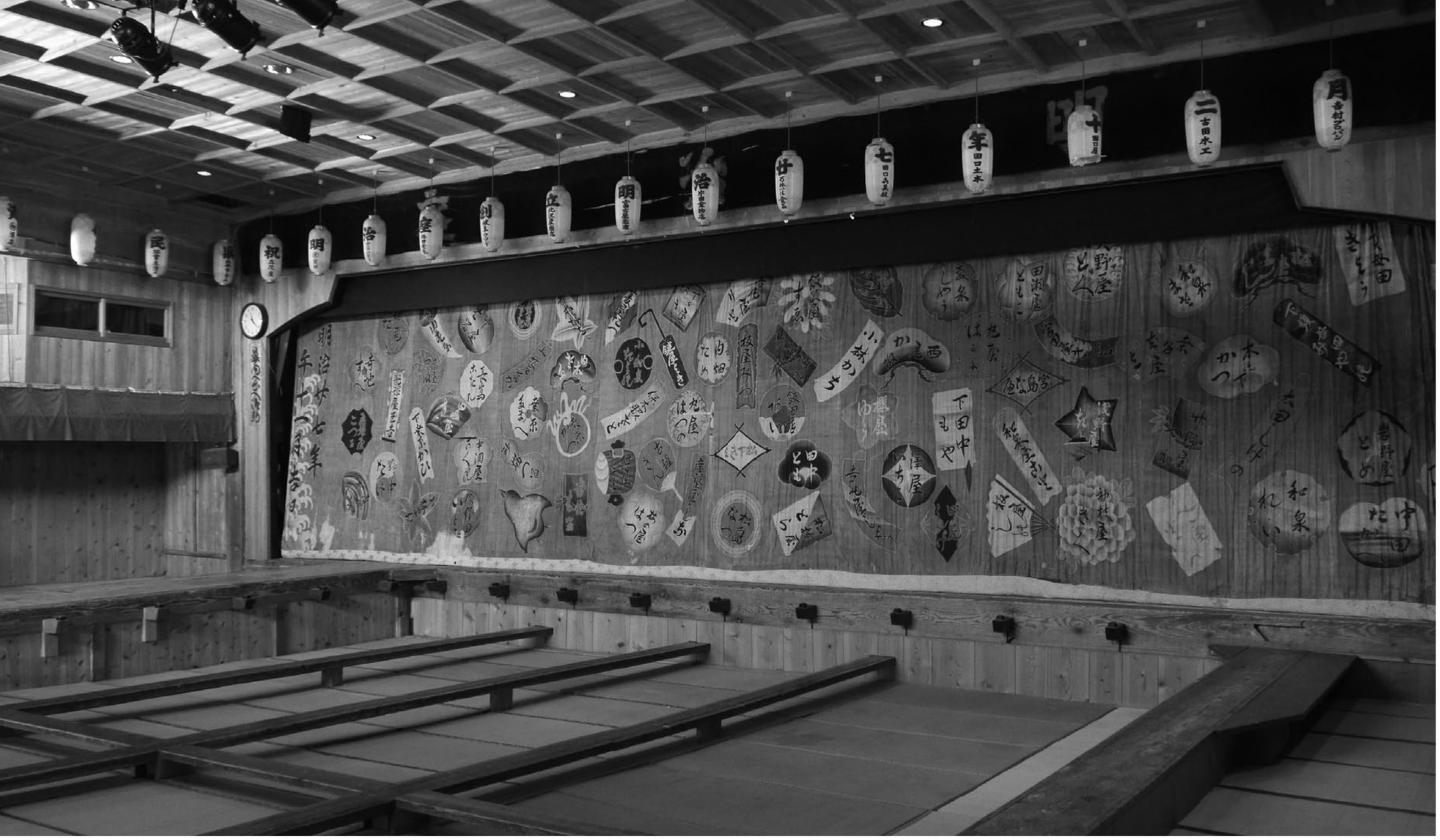
加子母地区（旧加子母村）は、岐阜県中津川市の最北端に位置しており、平成17年2月に市町村合併により加子母村から中津川市に編入合併しました。市町村合併後は、合併特例法による地域審議会を経て地域づくりの検討を進めてきましたが、平成23年7月に全世帯が参加・協力して地域の自立を目指すために「加子母むらづくり協議会」を発足させ、平成27年2月には「NPOかしもむら」として法人化を図り、持続可能な地域づくりに向けて本格的に活動を展開しています。その活動のひとつとして、地域の山村文化の象徴である農村舞台「明治座」があり、伝統芸能である加子母歌舞伎や明治座クラシックコンサートなどを通じて、都市と山村の交流を深めてきました。また、今年度で20年目を迎えた大学生を対象にした木造建築セミナー「加子母木匠塾」の活動も広がりを見せており、地域と大学との連携による「加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修」プロジェクトがスタートしました。

地域概要

当地区は、伊勢神宮式年遷宮に用いられる御神木の里としても知られており、江戸時代には徳川御三家である尾張藩の飛地領であった歴史もあります。
「明治座」は、村の人々の寄付と労働奉仕によって明治27年に建設されました。当時は全国的に村芝居の全盛期で、近隣だけで70軒もの芝居小屋が建てられました。「東濃の村芝居と西濃の花火は県下の二大病」とも言われ、若者が仕事を放りだして熱中するので新聞などで猛烈に非難されたほどでした。大正時代の不況などの影響でそのほとんどが姿を消していき、明治座も何度か取り壊されそうになった時期もありましたが、関係者の努力で回避されてきました。
明治、大正時代は劇場として旅芸人一座の興業や青年団による弁論大会等、村人の娯楽の殿堂として活躍しました。戦争中は軍需品の倉庫として利用された時期もありましたが、昭和22年「明治座保護会」が組織され、荒れ果てていた建物が修理され、以来毎年秋には、地元の役者たちによる加子母歌舞伎が演じられています。

設立年月 ･･･2011 年 2 月
法人化した年月 ･･･2015 年 3 月
メンバー数 ･･･988 世帯
代表者名 ･･･ 中島紀于（なかしま・のりお）
連絡先 ･･･ 〒508-0421　岐阜県中津川市加子母 3519 番地 2
☎ 0573-79-2111　kashimo-office@city.nakatsugawa.lg.jp
団体のミッション ･･･ わたしたちは、加子母地域の自立を目指し、これまで受け継がれてきた豊かな資源を守り、子々孫々に至るまで真の豊かさを伝えていくことを目的に活動を行っています。

加子母木匠塾が明治座の改修現場を見学しています。伝統構法について理解を深めながら、地域各地で行われる木造実習の活動へと繋げています。



活動に至った理由や背景

明治27年の創建から120年を経た明治座は、老朽化により雨漏りや屋根・床の不陸などの傷みが著しく、地域ではその活用と維持保存に不安を募らせていました。そのような中で、一昨年から地域と大学との連携事業により、加子母むらづくり協議会と建築構造学や文化財保存などの研究者を交えて調査と検討を重ねた結果、一般的な耐震改修に用いられる鉄骨などでの補強ではなく、明治座の持つ素朴な芝居小屋としての雰囲気を損なわないように伝統構法を最大限に駆使し、創建当時のままの板葺き石置き屋根への復元に着手することになりました。この復元工事により、明治座の文化財としての魅力はさらに高まることが期待されますが、重要なのは伝統的な木造建築技術や、既に失われつつあった屋根材を製作するための板へぎ技術を、如何にして次の世代につないでいけるかであり、それが今回の大きなテーマとなりました。

「明治座保護会」へのインタビュー風景。明治座の歴史と伝統を残し伝えるために、大学生が記録映像の作成に取り組んでいます。

ラボ通信

地域全てがキャンパス

交流と学び 実践

域学連携研究所「加子母Lab」主宰
名古屋工業大大学院2年 佐野智哉さん 23

1894年（明治27年）に建築された岐阜県中津川市加子母地区の地歌舞伎小屋「明治座」。10月の完成に向け、改修中の明治座を志田肇・同県知事が先月27日、視察に訪れた。関係者に工事の進み具合などを訪ねるその姿を、佐野さんがビデオ収録していた。「加子母に欠かせない明治座。完成までの映像はテータとして不可欠です」

加子母地区は、中津川市の山あいにある林業が盛んな地域。高齢化と過疎化が進む里山で、学生たちが1995年から、地元の工務店などでつくる「かしも木匠塾」で木造建築の基礎や技術を学び、明治座で秋に行われるクラシックコンサートに参加するなど、地域と大学が協力し合う「域学連携」が早くから実践されていた。

こうした現場から佐野さん＝写＝が、加子母全体を大学のキャンパスととらえ、「加子母大学」と命名。自ら暮らす加子母の家を第1号のサテライトキャンパスとして、域学連携研究所「加子母Lab」と名付けた。明治座の記録を残したり、学生と地域とのネットワークづくりに励んだりしている。

□域学連携　地域と大学が協力しあって地域活性化や、まちづくりなどに取り組む。職務を推進する事業で、地域では大学に集積される知識や情報、ノウハウが生かされるほか、地域で不足する若い人材の活用つながるメリットがある。大学でも実践の場が得られるほか、教育・研究へフードバックできるなどの利点がある。

建築デザインを専攻していた佐野さんが加子母地区を初めて訪れたのは、大学生だった2年前の5月。在籍していた研究室に「域学連携」という研究課題が設けられたのがきっかけだ。

佐野さんが加子母を訪れて驚いたのは、住民に根付いた地域コミュニティーだ。6月の第1日曜日は「環境デー」として、地区人口の半分にあたる約1500人が国道257号沿いで花を植えたり、「普請」と呼ばれる会合で住民が交流を深めたりと、「都会では希薄になりつつあるコミュニティーが当たり前のように残っていた」という。

佐野さんは、大学の卒業制作で「加子母大学」の模型を作った。学生が参加する木匠塾や明治座など地域全体を学びの場として設定。先生は地域住民、学生は林業や農業、歌舞伎など教えてもらいたい住民のところへ通う。老朽化した公民館を改築して図書館にしたり、神社を大学のホールとして活用したりするなどして、大学としての機能も備えさせた。

「域学連携」に取り組む佐野さん

■　□

大学院に進んだ後、昨年8月から、加子母に空き家を借りて、週5日加子母、残る2日を名古屋という生活を始めた佐野さん。今年1月から、名古屋との「二重生活」をやめて本格的に加子母に移住した。

翌2月には、市加子母総合事務所の協力も得て、域学連携の報告会「加子母大学オープンキャンパス」を開催。雪の山道散策や、炭作り体験のほか、かしも木匠塾に参加した京都大や金沢工業大、明治座の舞台道具の製作に携わった武蔵野美術大の学生らの活動報告会を行った。

今後、仲間を増やしていくことが目標という佐野さんは「田んぼや畑、森で学生と地域住民が交流しながら学び、協力していくことで、地域活性化に役立てば」と話す。〈松原輝明〉

活動の内容と成果

明治座の改修は、これまで地域が取り組んできた地域と大学との連携事業が発端となり、明治座の文化的価値を高めることと、失われつつある伝統技術の継承を目的に、取り組んできました。そのなかで、名古屋工業大学大学院に通う佐野智哉君（23才）が、加子母地域に住居を移し、加子母木匠塾をはじめとする大学生と地域を結ぶ役割を担うようになりました。8月には「加子母LAB」を設立し、明治座改修に関連する活動を行い大きな効果を生み出してくれました。以下、彼が「かしも通信」という地域広報紙に掲載したレポートから、本活動内容をお伝えします。

岐阜県重要有形民俗文化財である明治座は、創建から120年が経ちました。この大木造建築の柱はひしゃげ、梁はたわみ、虫食い腐れが各所に見られます。この木造建築を後世に残すために、地域は何をしなければならないのでしょうか?

今年度、平成の大改修が進められる中で、地域と大学が協力し試行錯誤を繰り返しながらも、多くの関わりや広がりが生まれてきています。今回、明治座を次の100年へと繋いでいくために、平成の大改修と並行して動き始めつつある活動について記したいと思います。

昭和の大改修―屋根の葺替え

明治27年、地元住民がお金を出し合い、材料を山から伐り出し、汗水流して建てられた明治座。時には、雨漏りを防ぐために屋根替えをしたり、天井を張ったり、多くの人々の手によって、明治座は現在まで守り続けられてきました。昭和48年の屋根の葺替えは、住民が協働で行い、写真にもその様子が残っています。

今回の大改修のポイントは、屋根がセメント瓦葺きからトントン葺き（榑葺き）に変わることです。40年前も、みんなが集まって作業してきたように、またみんなで屋根の葺替えができたらと思い活動を進めています。

平成の大改修―トントン葺きへ

起工式

「まだまだやらなきゃならんことがたくさん残っておる。」

12月11日、明治座改修工事 起工式の挨拶で明治座世話人代表の熊澤和之さん（76才）がそのようなことをおっしゃっていました。

起工式自体は30分ぐらいの短いものでしたが、明治座の独特な空気に包まれる中、集まった皆さんも同じ気持ちだったのでしょう。「みんなで守り、多いに活用していきたい。」「建物は良くなるのだから、中身ももっと活用していきたい。」というようなお話を伺いました。

また、明治座の顔として管理人を続けてきた安江智夫さん（79才）は、「こういうふうになるとは思わなんだ。本当にとってもありがたい。1日でも早く完成してオープニングのことを考えたいと思っている。」と語ります。

明治座の姿がこれから先100年200年と続いていくためには、みんなで守り、みんなで考えていく必要があります。

地域と大学生たちの繋がりを深めるためにも地域の広報誌である「かしも通信」や工事記録を残す「明治座記録映像」により、工事の様子を発信・議論する中で、次の活動へとつなげています。

青年文化発祥の場

平成26年度も、5月にはクラシックコンサート、8月は加子母木匠塾、9月は加子母歌舞伎が行われ、加子母じゅうで地域と大学が連携した取り組みが行われました。

その中で、平成27年2月21日には域学連携活動報告会「加子母る大学オープンキャンパス」が開催され、山仕事や歌舞伎舞台づくり、古民家改修コンペなど6つものイベントを行いました。

翌日には「山村文化の継承とこれからの地域づくり」といったシンポジウムも開催され、その中で明治座は「青年文化の発祥の場」であったことが伺えました。かつて明治座では、歌舞伎だけでなく青年団の主張大会や演劇、バンドなど若者たちによる多くの活動が行われ、その過程で

常に手が加えられ守られてきました。現在の若者たちとの連携も、明治座が文化を創造してきた延長線上にあるのだと感じます。

今年度も加子母木匠塾を中心に明治座改修工事の見学会や板へぎ体験など、次世代へとつないでいくための取り組みを行っています。

120 年の歴史をつなぐ

3月7日は、改修工事が進む中でセメント瓦が一気に取り外され、その下に眠っていた「トントン葺き（榑葺き）」が姿を現しました。明治座内部に入ると床板が取り外され、「石場建て」としての姿を見ることができます。石の上に一本の柱が立ち、大きな屋根を支えている明治座の骨格を目の当たりにし、これまで支えてきた偉大さを感じます。

このように今回の文化財としての修理工事は、床や屋根、壁などを一度取り外し、腐食部分の修復をしていきます。その後、板を一枚一枚、元の位置に戻していくため、屋根はガラッと変わるものの、内部は何も変化がなかったかのようになります。

工事中の明治座は、まるで解剖されているような状態であり、これまで地域住民の手で修復されてきた痕跡を一望することができます。そこで、この状態をみなさんに見てもらいたいと思い、地域住民向けに見学会を開き、定期的に見学する機会を設けています。

トントン葺き（榑葺き）に向けて

明治座では、大工さんや左官屋さんなど職人さんたちが修復工事をしていますが、トントン葺きに向けては、加子母のあちこちから地域住民が集まり、試行錯誤しながら板へぎを行っています。

3月24日には、へぎ板の製造に取り組んでくれている木工所や林業グループの方など約20名で、高山市にある飛騨民俗村・飛騨の里を訪れました。そこでは、県内で最後の板へぎ職人 山口末造さん（90才）に、数年ぶりに板へぎ

の実演を行ってもらい、どんな技術や道具を使っているのかじっくりと見学しました。

しかし、道具が足りなかったり、板へぎが初挑戦であったこともあり、なかなか一筋縄でいきません。さっそく加子母じゅうの家をまわって、かつて使われていた板へぎ道具（両刃のナタ）を探し出したり、みんなで話し合いながら、山口さんに学んだ技術を実践していきました。

トントン葺きへの道のりは本当に大変だと感じますが、いろいろな人が集まり乗り越えていく過程には、多くのエネルギーや熱意が込められ、知恵が集結し、技術が継承されつつあると感じます。

また4月1日には、山口さんが明治座見学に訪れ、後に届いたお手紙には「立派なものに仕上げ、長持ちする技術を伝えたい。自分が経験した技術をすべてお話しし、後世に残してもらえたら」と、書かれていました。

今回の明治座工事により、屋根が瓦葺きからトントン葺きに変わることがいいことか？　加子母地域内でも、メンテナンスや維持管理のことを考えると賛否両論です。しかし、事実として一人の職人さんが元気になり、すべてのことを伝えたいとまで思っています。このことからも、明治座は単に修復を行っているだけでなく、伝統や文化、技術を継承していく実験を行っている真っ最中だと感じます。なんとかこの知恵や技術を継承し、生業として定着していけたらと思います。

今後の予定

明治座維持補修基金

明治座の保存修理工事は今秋完成し、11月には加子母歌舞伎のこけら落とし公演が行われます。今年で、12年目を迎えた武蔵野美術大学と連携した加子母歌舞伎の舞台演出はこれからも続けられ、同様に21年目を迎えた加子母木匠塾の活動も続いていきます。

今回復活するトントン葺きは、少なくとも30年に一度は葺替えが必要になります。そのためには、技術の継承はもちろんのこと、屋根材となるクリ材の育成や資金の確保が大きな課題です。今回の改修にも、平成14年から「明治座維持補修基金」として、1口300円で寄せられた寄付金約2,000万円が活用されました。今後もさらに明治座を維持していくための資金確保に向け、実際に屋根材として使わせていただく「へぎ板募金」の取り組みも始めています。

明治座改修の広がり

「明治座 平成の大改修」は、もう一度地域の人々と明治座との関わりを紡ぎ出す転機となり、新たな可能性が多く生み出され、試行錯誤を繰り返しています。その中で生まれつつある活動としては、

木の文化を活かした生業づくり

- 多種多様な森づくり
- 適材適所の家づくり
- 板へぎの技術継承
- 木匠塾を通じた伝統構法の継承

明治座を活かした地域づくり

- 維持保存のための樽板募金
- 自主運営に向けた組織の強化
- 地歌舞伎の振興

地域と大学が連携した拠点づくり

- 加子母通信や記録映像などの情報発信
- 加子母 LAB 設立と木匠塾 古民家拠点の整備

これまでも明治座があるから活動が継続し、活動があるから明治座が残り続けてきたように、新たな活動や関わりを育む中で、次の100年へ向けた取り組みを模索しています。

町の記憶の宝庫・旧御師邸を核としたコミュニティづくり

特定非営利活動法人 旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議［三重県伊勢市］

団体設立の経緯

かつて御師は、全国からお伊勢参りに来て頂く仕組みを構築し、多くの参宮客を迎え伊勢のまちの隆盛に貢献するとともに、神領伊勢のまちの自治組織の中心的役割を果たしました。明治4年の御師制度の廃止や戦災の影響などもあり、かつての面影を残し現地に残っている御師邸は、旧丸岡邸のみです。他に残っている御師邸は、表門や庫裏の一部が移築保存されている程度です。慶応2年に改築された旧丸岡邸は長く空き家状態にあり、雨漏りによる腐朽が進み、その保全が急務でした。市民有志により平成22年10月に団体を設立し、平成24年4月に活動を維持し推進するためにNPO法人化しました。

外宮前山田地区のまちの記憶であり、大切な歴史遺産である旧御師丸岡宗大夫邸の保全活用を図り、地域に誇りと愛着を持って住み続けられるまちづくりを展開する。地域の歴史遺産を生かし、残し、伝え、次世代に引き継ぐ活動によりまちづくり、人づくりを図り、地域コミュニティの形成、町の活性化に貢献することを団体設立の目的としています。

地域概要

当地区は伊勢市の中心部、伊勢神宮の外宮前山田に位置し、今回の遷宮を契機に賑わいを取り戻した外宮周辺地区を除けば、多くの地方都市と同様に中心市街地の空洞化は深刻さを増し、かつての町の風情は急速に崩れています。しかし一歩町なかを深く観察すると、中世から近世にかけた伊勢の都市構造を代表する世古（路地）や公界堀（清川、豊川）、戦災を免れた「こまちなみ」や歴史的建造物、また芭蕉をはじめ多くの文人墨客の交流の物語が数多く残る地域でもあります。かつて御師達が自治都市としてまちづくりをしてきたように、市民による主体的なまちづくり、生活空間の快適性の確保のための景観整備、まちなか居住の推進などと共に観光都市として訪れて気持ちが良い空間づくりが求められています。旧御師丸岡宗大夫邸の保全活用等、当地区の地域資源を活かしたまちづくり活動を推進し、地域に誇りと愛着を持って住み続けられるまちづくりを醸成するとともに「歩いて楽しい町なかの演出」の拠点施設の整備が望まれている地区と言えます。

設立年月 ･･･ 平成 22 年 10 月 12 日
法人化した年月 ･･･ 平成 24 年 4 月 19 日
メンバー数 ･･･11 人
代表者名 ･･･ 阿形次基（あがた・つぐもと）
連絡先 ･･･ 〒516-0009　三重県伊勢市河崎 2 丁目 27-34
☎ 0596-27-0455　Tak17@amigo2.ne.jp

団体のミッション ･･･ 私達は地域の活性化を目指し、伊勢市山田地区のまちづくりの拠点となる旧御師・丸岡宗大夫邸の保存活用を図ることにより、伊勢市のまちづくり活動を推進するとともに、都市の記憶を次世代につなげる活動を行うことで、市民生活の豊かさと交流文化の広がりを図り、もって社会全体の利益の増進に寄与することを目的としています。

丸岡邸の古襖の下張はまるでタイムカプセル。江戸の様相が時代を超えて現れます。

烏帽子世古に面する丸岡邸長屋門と土塀

活動に至った理由や背景

平成22年のある日、知人から旧御師丸岡邸の建物を見てもらえないかという話が飛び込んできました。地域を代表する歴史的建造物として気になっている建物だったので、早速所有者の丸岡さんに見せて頂いたのです。10年ほど空家状態なっていて雨漏りもひどく、初めて中へ入った第一印象は、正直大変な状況でした。ただ経験上、整理し片付ければ何とかなるという感じはつかめました。御師邸として唯一現地に存在し、また長屋門タイプとしても唯一残っているものであり、この建物を残すことが私達の務めだと直感しました。建物はあまりひどい状態になると保存に共感を得ることは難しい、早く環境改善を進めなければと、保存活用に理解のある仲間や郷土会の知人、建築士会のメンバーに声かけをし、保存再生に向けた活動への参加を依頼しました。一方市教育委員会にも丸岡邸の保存再生に取組む旨を伝え、登録有形文化財として認定されるように支援を依頼しました。文化庁の担当者からは、建物の価値はすぐにでも登録文化財にはなれるが、維持管理体制が明確でなければ認定は困難であるとの意見を頂いたのです。丸岡邸を保存するには単に行政にお願いしていくだけでなく、私達も保存再生活動に覚悟を決め、正式に「旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議」を立上げ、地道に活動を展開することになりました。

活動の内容と成果

建物の保全及び改善活動

活動を開始してから雨漏り部の修繕、外部の景観維持に努めてきましたが今年度もさらに修繕に努め、少しでも良好な景観にするための建物維持の作業を進めています。具体的には外部は奥8畳の押入部分周りの修繕（屋根瓦葺き替え、腐朽部分の取替とトタン張り）、台風などにより落下した漆喰部の補修、主屋奥の便所部分、縁側および屋根軒先瓦部分の補修を行い、防雨対策が進展し、また通常の草刈りなど周辺環境整備も継続して行いました。

建物内部の改善作業は腐朽のひどかった4.5畳の外壁部、床の補強、開口部の壁、建具及び3畳の押入れ、地袋部を修繕し、畳を7.5畳分入れ替えるとともに新たに照明器具を設置し、活用できる部屋に改善しました。

また建具関係では痛みのひどい襖6枚を取替え、3ヶ所の格子戸を洗い、昔の姿に戻すとともにレールを修理し、動くように改善しました。このような作業の結果、室内の景観は良くなるとともに建物内の見学や活用できる部分が広がりました。

御師塾の開催
伊勢学サロン & ワークショップ

まだまだ改善が必要な建物ですが、できるだけ建物を使用した事業を展開することで、多くの人に旧御師邸としての保全活用の理解を高めることが重要であると認識してもらうために実施する事業の一つです。今年度は、伊勢学サロンとして御師の関わりや丸岡邸に関する以下のテーマで開催しました。

①伊勢参宮名所図会絵解き(3回)
②御師の献立再現食談会
③御札つくり体験会
④古襖の下張解体および仕分作業の体験会

①伊勢参宮名所図会（寛政 9 年 1797 年）の絵解きワークショップ

江戸時代の18世紀は視圜(しかん)拡張の時代であるといわれ、各地の名所図会もその中から生まれ、また人々は様々な情報を得ることで大いに動き回った時代であるといわれます。

情報が氾濫している現在、何を情報として発信することが効果的なのか、また伊勢の価値ある情報は何かを探る手掛かりとして、1797年に発行された伊勢参宮名所図会に焦点を当て、当時の伊勢町衆（御師等）が何を情報として発信しようとしたのかを探るとともに、その中に描かれているものを探求し、彼らの意図を理解することの中から今に活かすヒントを探ることを目的に開催しました。具体的には伊勢周辺の斎宮から伊雑宮の範囲を対象に行い、パワーポイントを活用して名所図会を拡大し、参加者の目線でじっくり見ていくと、今まで見えていなかったものが見えてきました。特に人々の風俗の描写は、御師や参宮客の様子はもとより服装や町並みの風景等当時の雰囲気を見ることができます。絵図の多くは、日本の神話などに出てくる歴史文化が紹介されているなど単なる景色だけではなく、地域のストーリーなどを取り上げていることは興味深いものです。現代のわれわれに地域の何を観光資源とするかを考えるうえで、多くの示唆を与えてくれるものがあり、参加者も多くの新発見があったようです。

たとえば神宮も江戸時代と現在ではかなり様子が違っていて、両宮とも板垣、外玉垣はなく、内宮では御正殿と東宝殿、西宝殿が横一列に並んでいる姿（長い遷宮の中断から復興した天正時代から明治（写真で証明される）までは此の構成であった）等です。地域の資料をより深く見ていくことで、今まで気付かなかった事象を発見できることを学びました。また参宮名所図会は、特に景色の向こうに見えるもの、地域の物語などを情報として発信することを先人たちはすでに行っていましたが、いつの時代も変わらない大切な視点であるといえます。

②御師の献立再現食談会

今回の食談のテーマは御師の妻に焦点を当て、丸岡家が所蔵する山水画の作者である東佩芳(はいほう)を取り上げ「御師の妻たちの様相・東佩芳について」をテーマに、講師は会長の阿形氏と丸岡氏で行ないました。伊勢の古道、神路通にある東家（古今伝授の祖・東常頼の系統を継ぐ）の東夢亭の妻で女流画人・東佩芳は頼山陽、江間江漢等との交流等が山水画から読み取れ、また女史は漢学にも素養があり漢学者夢亭を助け、その知識の幅は特筆すべきものです。江戸時代の伊勢人の女性（御師の妻）の文化度、教養の高さを垣間見ることができました。

お伊勢さんだけでなく人と人の交流も伊勢に来る契機でもあり、伊勢の文化度の向上に来訪者がいかに貢献したかが良くわかる事象の一つです。現代の私達にもその素養があるかを問われる食談会であったと思います。

③御札つくり体験会

御札の配布は御師の中心的なもので、かつて江戸時代は各御師家で御札を作り、檀家に配布していました。丸岡家に所蔵されていた版木の中には、大麻（御札）以外にも海苔等みやげの版木もあります。丸岡家所蔵の版木を活用し、御札作り体験を通してかつての御師の暮らしぶりを体感し、御師がどのような思い、仕組みで参宮者を迎えてきたかを知る体験会として開催しました。親子で参加でき、子育て世代の方も参加してくださいました。また参加者の中に神宮の版木を作っていた家の方もいて、少し以前まで御札の版木つくりが町中で行われていたそうです。同時に実施した古屏風解体の下張の中に御札の内容について書かれたものが出てきたのは偶然ですが、何か事を始めると関連したものが現れるものです。

④古襖の下張り解体及び整理体験会

丸岡邸の古い襖（奥8畳の取替えたもの）をはがし、下張りに潜む御師家の生活文化や歴史の記録をタイムカプセルのように開くことで江戸時代の伊勢人の素顔を実感でき、下張の古文書には、整理することで新たな発見や裏付け資料になるものがあるのではないか。また下張りをはがす解体、整理作業を体験することで各家に眠っている古襖などを歴史資料として扱ってくれる契機になればと、千枝皇學館大学助教の指導のもと皇學館大学生の協力を得て開催しました。

今回出てきた下張の古文書の内容については、今後の調査によって整理することになりますが、年代的に古いもので正徳（1711～16）、享保（1716～36）のものが見られ、中には多くの貸借証文があり、借金額と担保の関係は興味深いものが垣間見られる等、参加者は何が出てくるのだろうと興味津々で非常に満足されていました。

多くの借用書の存在は、檀家受け入れ時にそれに見合う額を町年寄衆中から借用し、多額の金利を払う仕組みは、町の運営資金を得る目的で考えられたものでないかと推測されます。古文書からかつての暮らしぶりを推測するのも楽しいものです。

ツインタイムトラベル体験事業

①ツインタイムトラベル「熊野古道編」

6月15日（日）開催（バス＆ハイク）

熊野古道世界遺産登録10年であることも考慮し、旧御師丸岡宗大夫家がもてなした文化6年（1809）の江戸本所の伊勢講の記録（牧野家文書）と丸岡家に残る献立帳文書をもとに、伊勢参宮を終えて熊野へ向かう行程を辿り、かつてのもてなしの様子や江戸時代から現代における地域の景観などの移り変りを体験することで、ツイン・タイムを旅する、丸岡家～大紀町阿曽宿まで2日間の行程をたどるものです。

実際に訪ねてみると伊勢参りのおおらかさ、伊勢から熊野への道は観音道であることがよく理解できます。巡礼着に着替えての行程には道引き観音地蔵、手引き観音地蔵等々が人々をいざなう施設が用意されています。伊勢と熊野のそれぞれの役割分担ではないですが、紀伊半島には陰と陽がまことにうまく存在していると気付かされます。熊野古道の世界遺産部分は、峠がほとんどなのでそこに注目されますが、街道沿いの集落と巡礼者の歴史文化にもっと光を当てるべきではないかと感じたツアーでした。地元のテレビ局である三重テレビが同行取材し、6月27日午後10時30より放映されました。

②ツインタイムトラベル「御師と芭蕉の交流の記憶を訪ねて」

10月26日（日）開催

芭蕉生誕370年を記念し、伊勢に6回訪れていると言われている芭蕉さんに焦点を当てました。御師の中には俳句の門弟も多く、市内には多くの句碑が建っています。御師と芭蕉との交流の記憶を辿り、かつての伊勢人の文化的土壌を実感し、もてなしや交流の様子を学ぶ食談会を行いました。元禄7（1694）年、伊賀上野で門人たちを招いて感謝の気持ちを表した、世に言う八月十五夜月見の献立（芭蕉が自ら作成した）を食しながら、江戸時代の御師と芭蕉の関係、伊勢山田の俳諧の様相を学びました。

御師文化再生フォーラム

「歴史的建造物を活かしたまちづくり」

11月30日　伊勢河崎商人館

まちの記憶、原風景である歴史的建造物・まちなみの価値や地域での役割を学び、各地で行われている保存再生活用の現状などを語り合い、地域の住民にとって身近な歴史的建造物等を通したまちづくり、人づくり、コミュニティづくりのヒントを探るフォーラムを開催しました。具体的には浅野聡三重大学大学院准教授による「歴史的建造物を生かしたまちづくり」の基調講演、各地の事例として伊賀の武家屋敷、鳥羽の大庄屋広野邸、二見の賓日館と当会から会長が、それぞれの歴史的建造物の活用について報告し、会場の参加者との意見交換を行いました。

歴史的建造物にはそれぞれその性格があり、また時代によっても相違します。それぞれの歴史的建造物には、建物を舞台として色々な物語が存在します。建物とともに時代の記憶やそこにかかわった人々の生き様や時代の生活文化は非常に興味深く、人々を引き寄せるものです。各建物が地域のまちづくりの拠点として、また交流の場としての役割を果たしている姿は、それをよく証明しています。地域の歴史的建造物が連携してまちづくり、人づくりに取り組んでいけばより魅力的なまちづくりが展開可能で、旧御師丸岡邸が江戸の町衆の姿を実感できる交流拠点として整備されることの必要性が、参加者に理解されたと思います。

地域らしいまちづくりのさらなる向上を目指せるかは地域コミュニティの底力にかかっており、地域の記憶の証人である歴史的建造物が大きな力になることが確認されました。

今後の予定

多くの市民や助成金等の支援を受けたおかげで、建物の環境改善が進み、丸岡邸を使用した事業が展開できるまでになり、また市民の保存活用への認知度も高まっているように感じます。

三重県教委は3月13日、国の登録有形文化財（建造物）として丸岡家住宅主屋他1件が国の文化審議会から文科大臣に答申されたと発表しました。私たちの保存再生活動を開始して四年余り、様々な取り組みで市行政、市民にその価値を訴えてきましたが、国の登録有形文化財に認定されたことは今後の活動に大きな力になると思います。

初期の目標である伊勢河崎商人館などと同様に市行政が担保し、建物を整備、民間が管理運営を担う方式で歴史文化交流拠点とし、一日も早く実現できるようにしたい。そのためにもこれまでの取組を継続し、地道に御師の歴史文化を掘り起こし、地域コミュニティの醸成に向けて、より広がりのある活動を展開するとともに丸岡邸の保存活用計画の策定に向けて活動していきます。

また伊勢市と伊勢商工会議所は平成27年3月、中心市街地の活性化を図るために伊勢まちづくり株式会社を設立し、中心市街地活性化に向けてスタートしました。

旧御師丸岡邸も対象エリアにあり、今後国の基本計画認定に向けて中心市街地活性化基本プランの策定に、丸岡邸の保存再生事業が位置づけられるよう活動を展開します。丸岡宗大夫邸を歴史観光都市伊勢の貴重なまちなか交流のための施設として、地域のコミュニティづくり、まち歩き拠点として貢献できることを理解してもらうように働きかけ、目標が達成できるように努めます。

古民家を拠点とした過疎山村地域と大学の交流による地域創造

かやの木会［三重県熊野市］

団体設立の経緯

南北朝最後の皇子「尊雅王」終焉の地とされている湯谷地区において、1992年に山林業「尾中銅治」氏を中心に、築百数十年の杉皮葺古民家「茅の木館」を拠点に「かやの木会」を設立し、紀伊半島山間に伝わる古民家保存と、山村の生活を支えてきた山仕事に係る道具等の収集保存を行ってきました。
しかし、この活動に係る賛助会員（サポーター）はピーク時には200人を超えていましたが、実際に活動に参加する人員は20人ほどで、高齢化が進むとともにその活動に支障を来す状況となりました。
そして、2012年を最後に、長年開催してきた「かやの木祭り」も中断を余儀なくされました。杉皮葺きであった古民家も維持管理の手が届かないことから、屋根をトタン葺きとせざるを得なくなり、ここに伝わる山林業における貴重な資料や伝承が、そのまま失われていくという状況に陥りました。
そこで、1998年以降いくつかの大学の社会調査実習の調査フィールドとして湯谷地区を含む五郷町が活用されてきた縁から、「かやの木会」を母体とした地域住民と学生との協働による村学協同委員会を新たに立ち上げました。

地域概要

三重県の南部に位置する熊野市は、ピーク時には34,000人ほどあった人口が、2014年9月には19,000人を割り込み、2015年中には17,000人台になろうとしています。高齢化率は35%を超え、「地方消滅」の消滅可能性自治体に数えられるなど、過疎高齢化が著しい地域となっています。
この地域は古来より平家や南北朝の落人伝説が残るところとして知られ、今回「かやの木会」の名の由来となった湯谷集落においては、いくつかの伝説と共に地名にもその名残が残されています。
基盤産業である山林業で栄えた地域ではありましたが、林業不況に加え過疎高齢化により林業従事者も減少の一途をたどり、今では数えるほどでしかなくなっています。
この集落の奥まったところにある旧尾中邸は、樹齢数百年とも言われる茅の古木とその石垣と共に古来の紀伊半島山間地の家屋の形態が残されており、昔からの山林業における貴重な資料が保存されているほか、現在も山林業を営んでいる尾中家には、この地域において古来より伝えられてきた「なすび刈り」という素材生産技術が唯一伝承されています。

設立年月・・・1992 年 4 月
メンバー数・・・20 名
代表者名・・・尾中銅治（おなか・こうじ）
連絡先・・・〒519-4463　三重県熊野市飛鳥町小阪 1022 番地
☎ 0597-84-0541　takoasak02@gmail.com
http://kayanoki.org/
団体のミッション・・・集落に伝わる木挽き歌や食文化など山村生活史を記録しながら、都市部学生と地区民との定期的かつ持続的な交流「山村遊学」及び都市住民との連携を図る「村都連携ネットワーク」の構築によって、地域の活性化を図っていきます。

会員と学生の手で「まつり」が再興された。企画に携わった中国からの留学生が開会宣言

活動に至った理由や背景

2013年12月1日(日)は、2013年度京都大学・関西学院大学等による合同社会調査実習の最後の日でした。学生がお世話になったお礼で各集落をまわっていたところ、ちょうど尾中鋼治さんと木挽きの体験をさせてくれる場で出会いました。

尾中さんはこの湯谷で林業一筋、機械を使わず自分の力で木を切ることができる数少ないひとりで、木挽きと言われるその技術を体験させていただくこととなりました。その際お聞かせいただいた木挽歌がとても心に響き、その場に居合わせた誰もがこの歌声をそしてこの技を残したいと願ったことが、このプロジェクトの始まりです。

しかしながら、この伝統を語り伝えようと長年続いてきた「かやの木祭り」も2012年を最後に途絶えており、その祭りを主催してきた「かやの木会」も休眠状態となっていたことから、何から手をつけていいのかまったく目途が立ちませんでした。

そこで、地元の方々との間で相談を重ねるうちに、HC財団の支援制度を知りエントリーを決めました。地元と大学との調整や地元協力者との協議にとまどったものの、結果としてなんとか採択していただき、このプロジェクトの実現に至りました。

活動の内容と成果

活動の始まり

この活動内容は、山村史のミニ博物館として活用された「茅の木館」に保存されている山仕事の道具・山村生活の必需品等の保存、木挽のうた・作業工程・枝打ち・杉皮剥ぎなどの記録、もう一つ大きな復活はこの地に20年続いた「かやの木まつり」をもう一度開催することでした。

まず、地元住民の方々の協働体制を構築するために、休眠状態であった「かやの木会」の元役員の皆さんにこのプロジェクトの趣旨説明を行い、多くの方々の賛同を得ることができました。大学との連携については、京都大学の社会学研究室を大学側の窓口として、これまで合同社会調査実習に参加してきた教員やOB、学生等による支援体制を整備し、熊野市在住の現地世話人を連絡員として活用することとしたのです。

当プロジェクトの実現のため「かやの木会」を再編するとともに、その下部組織として村学協働委員会を立ち上げ、実行委員会としての役割を持たすこととしました。6月初旬から大学においては調査方法や役割の分担などについて協議を重ね、地元においては委員会の構成等についての協議を発起人の間で行いました。

6月20日に地元のサポーター15名で第一回村学協働委員会が開催されました。6月27日には、京都大学、関西学院大学、京都教育大学、大阪私立大学などの学生実習にあわせて第二回村学協働委員会を開催し、地元の方々と今回のプロジェクトにかかわる大学側の参加者を交えた打ち合わせが行われ、「かやの木まつり」の復活を含めたこのプロジェクトが本格的に動き始めたのです。

古民家かやの木館で会長(この地域の当主)と学生が意見交換

新たに制作した「かやの木園」の木製サイン。会長と学生リーダーの手で

かやの木まつり
「古民家 in かやの木」の開催

大学側の役割として、まずネットワークを利用して、地元の人だけでなく地域外の方々にもこのプロジェクトに関心を持ってもらえようホームページを作ることから始めました。

また、今回のプロジェクトの目玉である「かやの木まつり」の日の決定については、地元行事と大学側のスケジュールに配慮することが必要であることから、地元において何度か会合が開かれ10月13日（祝）に決定しました。

そして9月半ばから数度にわたって祭り会場周辺を中心に、大学側からの参加者も得て草刈作業を実施するなどの作業の外、祭りの内容についても協議を続けました。

地元のまつりは学生の新しい発想で行いたいという意向から、木を使った大人も楽しめる遊びやこどもの体験学習、トレッキングなどが提案され、昔の木の遊び道具として作られた木馬（きんま）遊びの再現や、湯谷地区を巡る山村トレッキングがメニューとして組みこまれました。

また、まつりの名称であった「かやの木まつり」は、あらたな古民家を活用した交流の場としてという意味から「古民家 in かやの木」と決定し、ポスター・チラシの作成を行うとともに、各所に案内を発送するなど準備を進めたのですが、生憎の台風接近でやむを得ず11月16日（日曜日）に延期となりました。

やっと開催にこぎつけた「古民家 in かやの木」でしたが、地元の方々や学生等の合流による準備の結果、快晴のお天気にも恵まれ予想を超える300名近い参加者に来ていただきました。

会場では婦人グループによる地元郷土料理の再現や、木挽き体験、杉皮剥ぎの実演が行われ、ステージでは木挽き唄、盆踊り音頭、伊勢音頭などこの地域に伝えられてきた芸能が披露されました。また会場外では山村トレッキングに十数名の方が参加し、南朝の史跡や景観を楽しんでいただきました。

大成功に終わった「古民家 in かやの木」でしたが、今後の開催については、運営にかかわる住民の負担も考慮して間隔を置いた開催を目指すなどの方法で検討していきます。

村学協働委員会と
まつりスタッフ集合写真

「かやの木まつり」・・舞台裏

今回のプロジェクト、そもそもの目的は山村の記憶を記録すること、コミュニティの活性化に都市住民を呼び込むことで、その手段として「まつり」の再開を考えました。

結果として山村の記憶の記録はいろいろな形で達成できつつあり、都市住民とのコラボも今回調査に参画した大学のOGが地域おこし協力隊として五郷町に移住してきたことで、今後の動きに道筋をつけられました。

しかしながら、その媒体として活用しようとした「まつり」については、結果として300人近い参加者があの山奥に集うなど一見成功裏に終わった感がありますが、その一方で多くの課題を残すこととなりました。

その一つが、湯谷という集落の住民の多くが「まつり」に参加しなかったことです。「まつり」の主体となったのは、湯谷が位置する五郷町の婦人会、地域まちづくり協議会に属する有志、市内に居住する五郷町出身の方々、そして学生や大学関係者の方々でした。

湯谷地区の方の参加が少なかった理由として、この地区における複雑な人の関わりがあったからと考えられます。

今回のプロジェクトに参加した学生の中には、以前の「まつり」の運営が山村の主従関係での強制と受けとられ、地域住民の理解を得られなかったことが原因と分析しているものもいました。

また、地区が賑うことについて異論はないものの、以前行われてきた「かやの木まつり」の運営を巡っての不信や不満が参加を躊躇させたと思われます。

地区住民の高齢化も大きな要因であり、平均年齢80歳近い地域において個々の住民が「まつり」の手伝いをすることは容易ではなく、事前に手伝えないため、祭りの当日に参加できないということにもつながったと思っています。

五郷町のメンバーにおいても少なからず以前の失敗について懸念を抱いている方もおられましたが、やはり過疎地域の活性化のきっかけとしてこのような取り組みは不可欠であることから、実行委員会方式を基本にすることを確認のうえで、「まつり」を実施することとなりました。

紆余曲折はあったものの、実施する方向で確認されてからは、婦人の方々を中心に

「食」「伝承」をキーワードに「まつり」を成功させるべく盛り上がって行ったことは言うまでもありません。

当初、「まつり」への参加者は多くて100人から150人くらいと予想していましたが、ネットによる発信などにより、予想に反して多くの方々が集うこととなりました。その多くは五郷町以外から参加された方々であり、地元新聞情報により市内からいらした方もありましたが、遠くは大阪から参加された方も見られるなど、ネットの威力を改めて認識したところです。

学生たちのレポートでは、この種のイベントが地域活性化にもたらすものは少なくないとされる一方で、これだけにとどまらない外の仕掛け、たとえば都市住民との架け橋になる人材の発掘や、スローツーリズム、メディカルツーリズムを介した都市住民を誘う事業の創設などが必要との提言もされています。

また、今回の調査にかかわらず、今後大学との関係という枠を越えて、架け橋的な役割を学生たちが担うことで、村と都市との連携に貢献できるとの感想も寄せられていました。

当初からこのプロジェクトを企てるに当たり考えてきたことが、くしくも学生たちの中でも実感されたことは一つの成果であったかと安堵したところではありますが、やはりこの活動を継続していくには、ここ2年ほどの活動が大きな分岐点になることは間違いないと考えています。

しかし、地域住民をもっと巻き込むためには、氏神様である「石神神社」の祭りを再興する方が良いのではないかと言う意見もあり、「かやの木まつり」の開催については隔年開催の可能性も含め検討していくこととしています。

とにもかくにも、この企てを発案したものとしてはハラハラドキドキの展開ではありましたが、結果として五郷町だけでなく熊野市内の他の地域においても、村都学連携による地域活性化の動きが始まったことなど得るものも多くありました。

田舎に暮す人々は、日々の暮らしを楽しみながらも地域を守ることに疲れています。この種のイベントを開催することは地域の活性化を促す一方で、その疲れを助長することにもつながるということも考えていかなければなりません。

そのための村都学連携と思ってはいますが、地元の方々が「もてなさなければならない」という気持ちを強く持てば持つほど、連携が進まないということにも気付かされました。

地域が疲れない村都学連携…難しいことですが、道を探していきたいと考えています。

上:郷土食再現(地元婦人、学生の手で郷土食がよみがえる)
下:山の記憶を古老に聞く(山の暮らしの実態が赤裸々に)

山村の記憶の記録

2014年6月27日28日、9月13日～16日、11月29日、30日に京都大学・関西学院大学・大阪市立大学等の学生による合同聞き取り調査を行いました。26年度分の聞き取り調査についてはそのまとめが終わっており、27年度にも同様に生活史についての聞き取り調査を実施していきます。

また、ビデオ、デジカメによる記録については、山林作業や木挽き唄などの録画・録音・画像処理を行っており、今後27年度に撮影するものと併せてライブラリー化して保存して行くこととしています。

今後の予定

京都大学卒業生が、今年度から五郷町駐在の地域おこし協力隊として採用されました。彼女を活用して当初の目的のひとつであった都市住民との交流や、空き家情報の発信や滞留者によるコミュニティの維持について、地区住民、行政と協働しながら実施して行くこととしています。

茅の木の下で再会

古民家まつり 里山に久しぶりに活気

熊野市五郷町勝谷である古民家・茅の木の下に多くの住民や来場者が集い、活気のかやの木まつりin16日、「古民家まつり」が開かれ、今回、地域のシンボルを見せた。

同町では2011年まで20年にわたり「かやの木まつり」が開かれており、今回、山村の記憶を記録しているいう熊野市五郷町を中心とした市民有志とこれに賛同する京都大学や関西学院大学の学生らで組織する村都学連携事業が、住民と交流する会が企画し、村を復活させる催しを復活させ現在の状況などを調べた。

まつりが始まる前の午前9時からは、勝谷で刀鍛冶を含むて後世に残したいとグ、勝谷名所散策が内で勝谷トレッキン角会館一郎さんの案

【威勢よく木挽き体験】

【元気よく開会宣言する学生たち】

【ゆったりと交流を深める来場者】

【木登り実演する高中さん】

明された。

午前10時30分、学生たちが会場のイクリングで中国から留学生、タイ国の大学生が出席国際と日本語で挨拶し、まつりの始まりを告げた。

林業で栄えた勝谷では林業を中心に体験は、林業を中心に体験も行われ、来場者が昔のノコギリを使

いた丸太引きに挑戦した。屋中、大会がるこを続けた。開年ここ数年は、実施されず、ゆったり、8月子供会がこの日、なんでも味わえるお祭り、西さへとが、舞唄、唄、祭の声が漏れていた。

また、木馬きんまも満喫され、子どもたちが寒の上を滑って遊ぶ、懐かしい光景も見られた。会場では弾き鉄砲や

野菜の

ダッズ村　父子が創る父子の為の地域子育て支援拠点

ダッズ村プロジェクト［京都府城陽市］

団体設立の経緯

私たちメンバー全員は、普段は普通に仕事をしているその辺にいるオヤジです。
メンバ-のうちの2名が子どもと共に畑を開墾するという、私的目的からスタートしたプロジェクトです。その開墾という「仕事」が子どもの創造力を掻き立てるということを感じていました。
そんなとき、現代表者である脇本から、「子どもの幸せプロジェクト」の馬見塚珠生さんの呼びかけによる「現役の父親たちが次世代の親となる若者や子どもたちの育成に貢献するきっかけを作るプロジェクト」に関わっているので、協力してほしいとの要請がありました。
まずは、「キックオフ会」という名の「飲み会」を開き、ものづくり素人のオヤジと子どもだけで秘密基地をつくるという方向が確認されました。
秘密基地をつくるための敷地の草刈りから始めることで、共に汗を流しました。ものづくりという「無形の価値=経験」を通じて、父親同士が、いつの間にか自然と交流していく姿を見たことで、「ものづくり」をツールとして地域になんらかの影響を与えられるのではと、皆で話し合い、ダッズ村プロジェクトとして活動を開始しました。

地域概要

京都府城陽市青谷地区は、城陽市の南端に位置し、京都府下一を誇る青谷梅林や宇治茶の産地として有名です。古くは、「青谷村」と呼ばれていましたが、昭和26年城陽町（市）に編入されました。東には低い山々を負い、西には木津川が流れ、梅林や茶畑が風景をつくる、風光明媚な地域でありました。
しかし、近年、新たなバイパス道路や工業団地建設による工場誘致により、自然環境が変化し、宅地開発による郊外化の波も押し寄せてきています。
更に、高齢化・後継者難に伴う青谷梅林の休耕田の増加などの問題が発生しています。ダッズ村プロジェクトでは、京都市や宇治市のような観光資源や名産品を青谷地域の「誇り」には据えず、淡々と営まれてきたこの地域の先人たちの「日々の生活」が「誇り」であると考えます。
その「日々の生活」が形づくってきたのが、青谷の風景です。今、まさにその風景が崩れようとしている中で新たな「ダッズ村」という風景をつくる為に、「日々の生活」や「社会の在り方」を見直しています。

設立年月 ･･･2013 年 6 月
メンバー数 ･･･16 名
代表者名 ･･･ 脇本尚憲（わきもと・たかのり）
連絡先 ･･･ 〒617-0006　京都府向日市上植野町南開 1-14
☎ 090-4039-4089　dazaodani2013@gmail.com
http://kyotosyohyaka01.com/
https://www.facebook.com/dadsvillage
団体のミッション ･･･ 現役のお父さんたちが、子どもたちの育成に貢献するきっかけとして「原理原則のものづくり」「忘れてしまった本気の遊び」を利用し、家庭や地域の安全安心を生み出していくことを目的としています。

次代の建築業界を支える学生と大工になりきるオヤジたち

活動に至った理由や背景

現代社会においては、ワンストップサービス・人口減少等により「お客様体質」の親や子どもが増え、それに準じて、「学校」「幼稚園」「保育所」を含む「社会全体」がサービス業化しつつあり、まさに、思考停止状態でも物事が動いていくという「便利な世の中」であると考えます。

しかし、この状況を誰もが疑問に感じてもいます。

我々、ダッズ村プロジェクトのメンバーは、自らが子育てに関わるようになり、話を重ねるうちに、この「お客様化」に疑問を持ち始めました。

更には、子どもの将来を考えた時に「お客様化」しつつある自分たち大人に育てられた子どももやはり、自ら考える力のない人間に成長するのでは、という危惧を感じるようになりました。

小さいながらも「一から自らつくる」ことで、「自らが責任を負う」という「経験」を経て、自ら考え、行動できるのではないでしょうか。その手法として、「原理原則のものづくり」が最適な方法だという結論を導き出しました。

昨今叫ばれている「イクメン」や「父親の子育て参加」や「ワークライフバランス」という言葉に添う活動ではなく、まずは親である自分たちを「自ら育て直す」という思いから活動を開始しています。

親子で土壁づくり

城陽のハウス来春竣工へ

ダッズ！プロジェクト

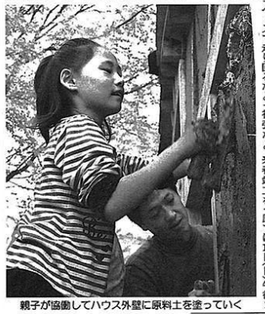
地域活性化を狙う「ダッズ！プロジェクト」（脇本尚恵代表）主催のオープンデーが先頃、城陽市市辺の一軒家ハウスで行われ、父子らはわいわい土壁づくりに励んだ。

同プロジェクトは、ハウジングアンドコミュニティー社団とトヨタ財団の支援を受け、親子で自然を切り開き、基地を作り田畑を耕すことなどを構想、実行している。

脇本代表＝井手町＝と京都大准教授＝植物学＝の柘植知彦氏代表＝宇治田原町＝を核にアイデアを集め、メンバーも増え、昨年、立ち上げた。

コンセプトは「昔ながらのものづくりを実践し、魅力を伝え、地域の人たちと経験を共有するとプロセスを楽しみ、地域活性化につなげる」。宇治田原町では、もこれまで荒れ放題の山間部の放棄畑、クリ拾いなど農業年齢も異なる参加者たちが楽しんでさまざまな。

このうち、ハウスは、専門家などの建築関係者協力のもと、実習で用いた家屋の解体材を寄付してもらい、平屋の「基地」を完成させ、ウーと2月に会員所有の約300㎡の当地に約30人の親子らが土壁用に各地から準備していた地元産の土とワラを混ぜた原料土を外壁に塗り付け



親子が協働してハウス外壁に原料土を塗っていく

ていった。

子供たちは作業の合間、農園を想定したスペースを走り回るなど、楽しそうに歓声を上げた。【写真】

限界の石垣きや農業補強など、来春竣工を目指し運営活動を続ける。

なお、ダッズ宇治田原では14日（日）午後2～5時に北石垣検を企画、両農園の地権を見て回る。参加希望者は総合文化センター集まるとと問い合わせは柘植さん＝メールtsuzae@eurweb.ne.jp＝まで。

活動の内容

2014 年 4 月 19 日　軸組移築

素人だけで「原理原則のものづくり」を楽しむとしていた我々ですが、この建て方に関しては、講師としてプロの大工さんをお願いしていました。心強く思っていましたが、まさかの前日キャンセルが発生しました。スムーズに進むはずが、大工の卵と素人集団による危険な棟上げを開始しました。

当日は、大阪工業技術専門学校大工技能学科より寄贈された軸組を再利用する為に、移築と建て方を父子、学生で行いました。順調に作業は進んでいきました。しかし、作業中盤からトラブルが続発しました。ですがメンバーの「まぁ～。いけるやろ」の一言で続行し、なんとか皆様の協力のもと、建て方を無事に終えることができました。

建て方終了後は上棟式を行い、その後、参加してくれた子どもたちの為に駄菓子撒きを行いました。参加者全員が、現状の経済性のみを考えた家づくりでは体験できないであろう「無形の価値＝経験」ができたのではと思います。

2014 年 6 月 28 日～ 8 月 3 日　屋根下地工事

建て方から約2か月後、不備があった小屋組の工事を終えることが出来ました。しかし、見た目には余り変わってないこともあり、我々の喜びとは裏腹に隣地で工事をするおじさんからは「あんまりすすんでないなぁ～」と言われる始末。しかし、通常ではプロしか触れない小屋組の部分を素人だけで組みあげられたことに、喜びも倍増しました。

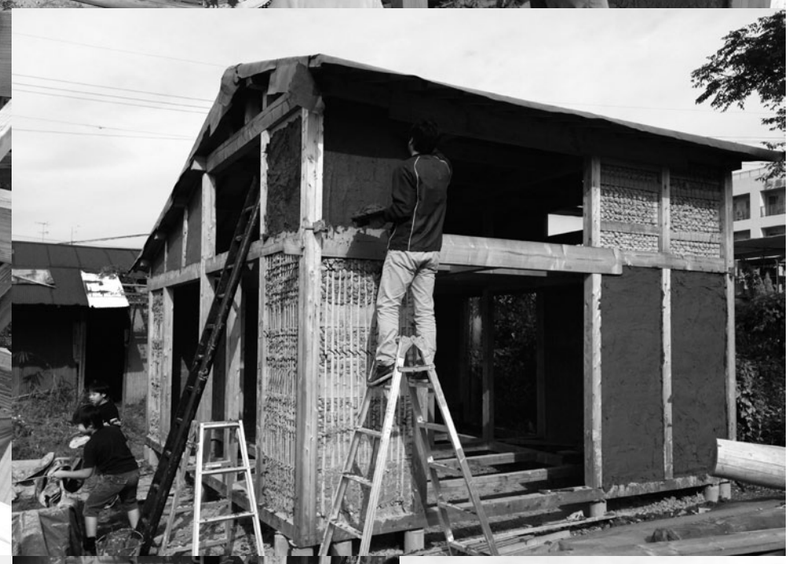
小屋組も無事完成して、いよいよ屋根の野地板張の開始です。作業を重ねるごとにメンバー間の士気も高まっていき、いよいよ今日で完成という日は真夏の8月でした。

杉板をひたすら手打ちで釘を留めつけていきました。Tシャツからズボンまで汗だくです。しかし、ほぼ休憩なしで作業したおかげで、夕方には屋根のルーフィングまで張り終えました。

この屋根下地は真夏の作業だけに、完成時は部活動の終わりの清々しい気分を思い出し、言葉には言い表せない嬉しい気持ちになれたオヤジたちでした。

2014 年 8 月 30 日～ 9 月 14 日　竹小舞

あらかじめ、放置竹林から伐採して割っておいた竹が、いよいよ登場の時を迎えました。しかし、素人集団である我々は竹木舞の掻きかたを全く知りません。そこでYouTubeで「竹木舞　掻き方」と検索し、職人の技を盗んでいきました。



プロの領域であるが為に、「これでなければいけない」という思考が常に頭の中にありましたが、ものづくりの原理原則を考え、「ようは、こうなってたらええんとちゃうの」を導き出し、思考錯誤しながら進めていきました。その過程では、素人ながらに縄を編むのが得意で、「こんな感じちゃうの?」と器用にやってのけるオヤジが出てきたり、段取りがやたらよいオヤジを発見したりと、様々な気付きがありました。そのような充実した活動を続けるなかで、最終的には「出来るのか?」から「出来るやん!!」に我々の思考回路も変わって行き、自信がつきました。

2014 年 9 月 21 日

第 1 回 土壁塗りワークショップ

この日の土壁塗りは、オープンデイとしてたくさんの方に参加して頂きました。心配していた天気も秋晴れとなり、地域の方々を中心に70名を越える方に参加していただきました。大人も子どもも最初は丁寧に作業していますが、体のあちこちに土が付き出すともうお構いなしにコテも使わず手で作業をはじめます。同時進行でテントの中では竹細工名人のおじさんに来ていただき、小刀を使って竹を削り、形を作ったらマジックで思い思いに色をつけて、オリジナル竹トンボの完成です。昼食は恒例となったダッズはがまカレーを皆で美味しくいただきました。

子どもも大人も「楽しみ、遊ぶ」ということの重要性と、土という素材を素人が扱うことの無限の可能性を認識できた1日となりました。

また、城陽市社会福祉協議会様の協力を得て、テントを貸して頂きました。このような活動が、一つの団体だけでは広がりを持つことができないと、改めて気づかせていただく良い機会をいただきました。

2014 年 11 月 8 日

第 2 回 土壁塗りワークショップ

内部の荒壁塗りが終了し、いよいよ、外部側の荒壁塗りを行いました。土という素材は、普段から新建材に囲まれている大人にも子どもにも魅力的な素材になります。この日は、そんな土を扱うということもあり、多くの地域の方々に「経験」をして頂く為に、恒例のオープンデイとしました。ありがたいことに、親子10組、計30名程度の方が参加してくれました。オープンデイ当日、子どもたちは、土を運んでは竹木舞に向かって土を張り付け、延ばすという作業を夢中になって繰り返していました。この日参加してくれた子どもたちには、土と藁と水を混ぜることで、藁が発酵して異様な臭いがすること、

茶色だった土が発酵することで黒くなっていること、土は汚れても水で綺麗に洗い流せるから身体いっぱい使って遊べることなど、様々な発見があったようです。

2014年11月8日　瓦据付作業

屋根も安価で、素人にも出来る方法をメンバー間で模索していました。そんな時、地主である古川徹氏から「うちに古瓦あるし、使うか」の一言に、瓦を敷く方法も何もかも不明な状況でしたが、「無償」というだけで、おもわず、「おっちゃん！ありがとうございます！使わせていただきます！」と返事をしていました。ここから、瓦の据付方法の研究が始まりました。昨今の瓦の据付方法は、桟を打ち付け、そこに瓦を引っ掛けるという方法を取っています。建物の構造を考えると、多少の軽量化が図れます。更には、作業効率も上がると考えられます。しかし、素人のオヤジ集団にとっては、少々難しい方法でもあります。そこで、昔ながらの土葺きを採用しました。電気も機械も知識もない状況を、我々は皆の力を結集して乗り越えました。

上:土壁塗りに参加した全ての子ども
と大人で記念撮影
中・下:誰にも無謀だと言われた人力
&素人による瓦葺き

活動の成果

お母さんたちが行うような直接的な子育て支援を行うのではなく、「仕事ばかりで遊びを忘れたオヤジたち」が集まり「本気の遊び」を思い出すことで、笑い・喜び・感動し、心に余裕を持って家庭へ戻ります。心に余裕のあるオヤジたちの家庭への貢献度は上がります。それが、間接的ではありますが、子育て支援につながるのではという楽天的な考えをもって活動してきました。

そんな中でも、8項目にわたる、「ダッズの勘所」を皆で導き出すことができました。

1. こうでなければいけないを排除する
2. とにかく自ら楽しみ、楽しむ姿を子どもらに見せる
3. 自分にも仲間にも、
時間や力量において必要以上に求めない
4. 課題が見つかれば、その都度本音で話しあう
5. 自らつくることの醍醐味である
「経験！」を共有する
6. 子どもの鋭い感覚や自走力を再評価すること!!　信じること!!
7. 「危ない！」「あかん！」を禁止する。
それが体力、耐力、自主性、社会性を育てる
8. 自らの力で、考えに考え抜いた後に、
周りの人たちを頼る！

今後、この活動をどのように、地域のオヤジあるいは、地域の枠を超えたオヤジたちにも発信していくのか、あるいは、興味を示してもらえるのかが我々の1つ目の課題です。

2つ目の課題は、ダッズ村完成後のストーリーを更に明確化し、実行していくことです。

今年度の目的であった、集まる「場」としての綴喜ハウスの建設は、床張りと建具工事を残していますが、完成は見えつつあります。ソフト面の目的である「自らを育て直す」という目標は、いまだ道半ばです。しかし、それぞれのメンバーの心境の変化は生まれて来ています。又、継続するということは、様々な場面や未知の世界に飛び込むことが出来て、様々な考えを持った方々と出逢えるということを知りました。

まずは「自分たちが楽しむこと」というスタンスは、受け入れ難いという方々もいらっしゃるかもしれません。しかし、我々自身の「働き方」や「家族との関係性」や人生における「幸福感」には、明らかに影響を及ぼしています。更に、継続して行くことで地域にもなんらかの足跡を残せるのではと考えています。

最後に、私たちダッズ村では、我々大人が自分のことで精一杯で、生真面目すぎれば、子どもたちが心底楽しい生活を送れるようにうまく助けてやることはできないと考えます。これらを改善するには、大人が自ら「遊び方」を思い出すこと。そうすれば、壁にぶつかった子どもたちへ「遊び心」を持ってアドバイスしてあげられます。このような「遊び心」を持ったオヤジをたくさん増やし、その魅力あるオヤジたちが魅力ある地域・魅力的な人材の育成へと導いていけると確信しています。

今後の予定

綴喜ハウス完成後は、既存の倉庫改修、デッキやピザ窯などを設置して地域の人々が気軽に立ち寄れる仕組みをつくり、開放していきたいと考えています。

地域に住む父親同士が、子育てあるいは子どもを通してつながっていくことを目指していき、父親自身が交流を心底楽しむことで、父親としてのクオリティーを上げ、様々な人生観に触れる良い機会を提供していける団体であり続けたいです。

また、その様々な交流の中には、子どもが主体となれる機会を設けることによりその子どもの発達も促していきます。それが、当初からの目標である、子ども達に「無形の価値=経験」をさせてあげるということにつながっていくのではないでしょうか。

その為にはやはり、ダッズ村建設にさまざまなオヤジや子どもの参加を促す仕掛けをつくり、自ら村をつくることで、村に愛着を持ってもらうことが先決です。

更には、次年度の予定である隣接した既存倉庫の改修が完了した後は、メンバーから提案された地域防災拠点としてのダッズ村を目指します。

滞在するための方法として、水を確保する為の井戸堀・燃料（薪）を確保するための里山の整備・太陽光発電システムの設置・トイレの設置・カマドの設置などを行っていきます。

周辺の地域の人々が、非常時にダッズ村を突然利用するということにはつながらないと考えています。その対策として、ダッズ村内だけの活動に留まらず、青谷地域の課題である休耕田や青谷梅林の活用があります。田植え、苗や梅の収穫、収穫物を共に食すことで人と人のつながりを強め、そのつながりが、喫緊の課題である風景を守ることにつながるのではないでしょうか。そしてそれが地域の「誇り」につながり、巡り巡ってダッズ村への愛着へとつながり、その共通の愛着心が揺るがないコミュニティーの形成につながる、そんな活動を地域の方々に提供していきたいと思っています。

築百年の洋館”海友舎”の再生からはじまる記憶の継承

ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会［広島県江田島市］

★現在の団体の名称は「ぐるぐる海友舎プロジェクト」に変更しています。

団体設立の経緯

江田島市江田島町に、築百年を超える洋館“海友舎（かいゆうしゃ）”があります。2012年、海友舎は空き家になろうとしていました。江田島市内外から、海友舎を後世に残したいという想いを持った有志が集まり、所有者の厚意と地元の方々の好意的なご協力のもとに、ぐるぐる海友舎プロジェクトは発足しました。
ぐるぐる海友舎プロジェクトでは、「手入れする」「使う」「学ぶ」「発信する」の4つの軸に沿った活動を展開しています。海友舎の再生・利用による新たな魅力づくりを通して、高齢化の深刻な島に若者を集めて、地域の問題を地域内外の力で解決していくことを目指しています。

地域概要

江田島市は、広島県南西の広島湾に浮ぶ江田島、能美島とその周辺に点在する島々で構成されています。2004 年に、江田島町・能美町・沖美町・大柿町の4町が合併しました。面積は100.74㎢、人口は約25,000人です。広島市からは海上約7.5km、呉市からは海上約6kmの位置にあります。船で広島市まで約30分、呉市まで約20分です。呉市とは、音戸大橋・早瀬大橋の両架橋により結ばれ陸続きとなっています。果樹と花卉の県内有数の産地で、全国有数のカキむき身生産量を誇ります。
江田島は、世界三大海軍兵学校があった島として知られています。海軍兵学校は、1888（明治21）年に東京の築地から江田島に移転してきました。1945（昭和20）年12月1日に閉校するまで、57年間にわたり海軍士官養成の場としての歴史が築かれました。終戦後は米軍や英連邦軍等が進駐し、使用されましたが、1956（昭和31）年に海上自衛隊が施設を引き継ぎ、その後海上自衛隊幹部候補生学校が独立開校し、海上自衛隊第1術科学校が発足しました。敷地内には、旧海軍兵学校生徒館（明治38年）、大講堂（大正6年）などの建築物があります。

設立年月 ･･･2012 年 10 月
メンバー数 ･･･ 会員 52 名
代表者名 ･･･ 南川智子 （なんかわ・ともこ）
連絡先 ･･･ 〒737-2122　広島県江田島市江田島町中央 2 丁目 7-10
☎ 0823-36-5220　kaiyousya@gmail.com
http://www.kaiyousya.com
http://www.facebook.com/Gurupetajima
団体のミッション ･･･ わたしたちは、 海友舎を交流の場として再生することで地域コミュニティーの活性化と観光資源としての新たな魅力づくりを行っています。また周辺地域の歴史調査も進め、 江田島独自の歴史文化を発信します。

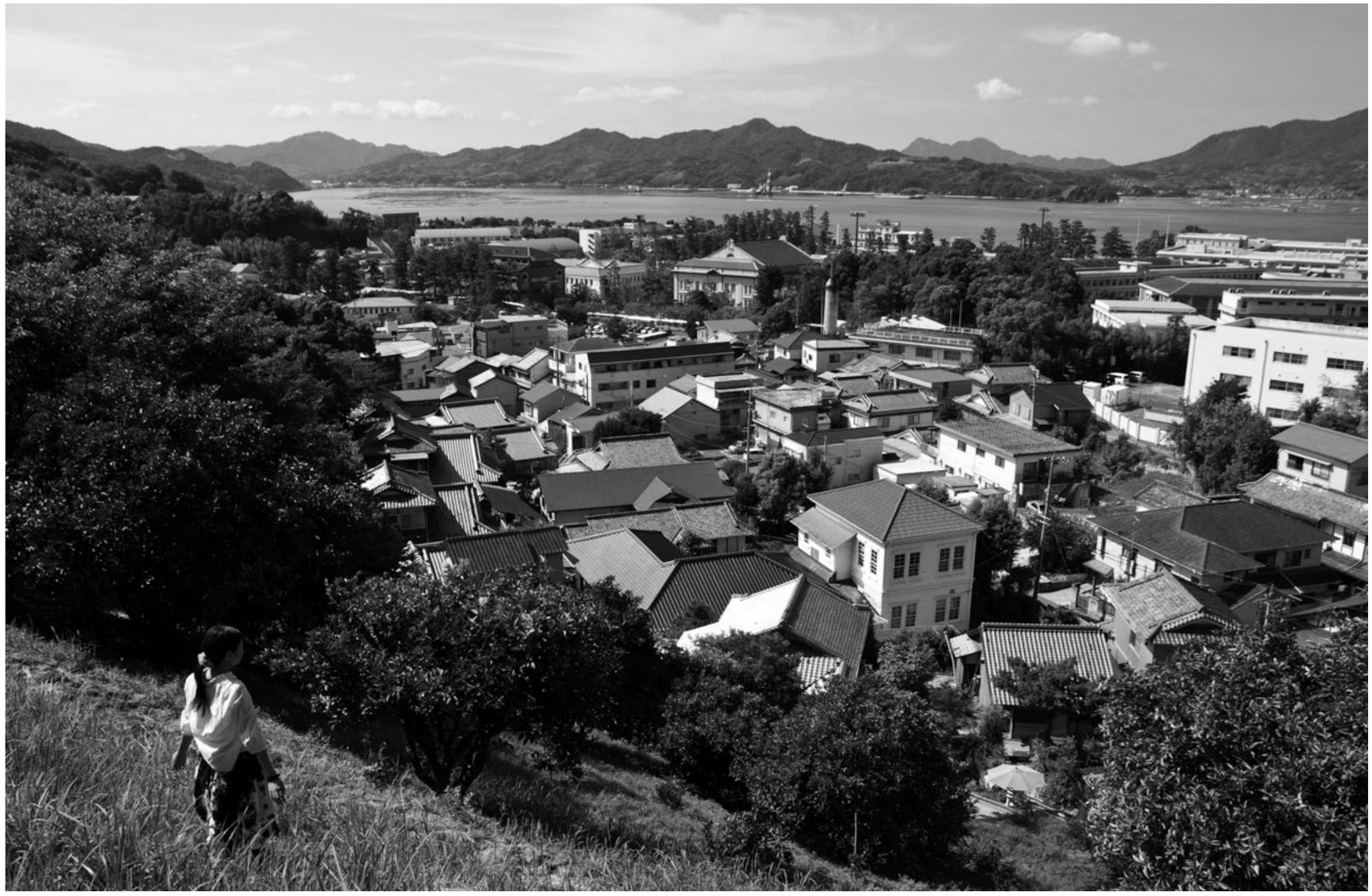
活動に至った理由や背景

海友舎は、会社の事務所として使用され続けてきました。2012年9月、海友舎を使用して来た事務所が撤退することになり、空き家になろうとしていました。所有者は、「建物を残したいけど、維持費の捻出に困っている」という問題を抱えていました。2012年10月に海友舎を後世に残したいという想いを持った有志が集まり、所有者の厚意と地元の方々の好意的なご協力のもとに、海友舎の維持管理のお手伝いとチャリティーイベント等により後世に残す方法を探るべく、ぐるぐる海友舎プロジェクトは発足しました。

当初、地元でも建物の歴史や存在はあまり知られていませんでした。そこで、高齢者からのヒアリングを通して建物の変容について調べ、近隣住民を招いた建築見学会を定期的に行いました。また、長年使用されていなかった倉庫状態の部屋の清掃活動をお掃除イベントとして実施しました。イベントを通して、海友舎や江田島に想いを持つ仲間が集まりました。

海友舎（旧江田島海軍下士卒集会所）について

海友舎は、江田島市江田島町中郷地区の閑静な住宅地にあります。海軍兵学校で働く兵士や下士官用の娯楽兼福利施設として建てられました。地域に唯一残る海軍兵学校関係施設で、空襲さえも免れてきた歴史的に貴重な木造建造物です。1948年、海友舎は民間に払い下げられ、健康器具販売の会社を立ち上げた元海軍士官の二人が購入しました。戦後しばらくは、戦争未亡人のような地域住民への職業普及事業の一環として、洋裁教室の場としても使用されたといいます。その後、会社の事務所として使用され続けてきました。2012年、海友舎を使用してきた事務所が撤退することが決まり、ぐるぐる海友舎プロジェクトが発足しました。



地元の高齢者から聞き取り調査

近隣住民を招いた建築見学会

活動の内容と成果

手入れする

歴史的建造物である海友舎を、より良い状況で維持するために、みんなで定期的に掃除や片付けをしています。掃除をすることで、現代建築では真似できない当時の技術や美も発見できます。海友舎には広い庭もあります。

毎月第1日曜日（2015年4月から毎月第2日曜日に変更）は、海友舎のお掃除の日として、メンバーが集まり建物のモップがけなどの定期的な掃除をしています。掃除の後には、運営やイベント企画について話し合いを行う定例会をしています。毎月5〜20名程が集まっています。参加者は、学生、親子連れ、サイクリスト、アーティストなど、子供から高齢者まで幅広い年齢層の人がいます。呉市や広島市から通って来る人もいます。木の剪定方法などを教え合いながら楽しく取り組んでいます。井戸水での水汲みは子供たちに人気のイベントです。

ぐるぐるしましまあるある　集合写真

美術部

手芸部

ぐるぐるエコたわし

使う

明治末期に建てられた海友舎には、時間を積み重ねたものがもつ味わいがあります。畳や床の間もあり和洋折衷の趣があります。この魅力的な空間をギャラリーやイベントスペースとして活用していきます。プロジェクトの趣旨に賛同していただける団体または個人に貸し出しもしています。

メンバーの特技を活かして定期的に「ぐるP部活動」を行っています。現在、美術部と手芸部が活動しています。建築好きに限らず、多様な人が気軽に立ち寄れるきっかけづくりを目指しています。手芸部では、海友舎グッズとして「ぐるぐるエコたわし」の制作と販売をしています。収益は、ぐるぐる海友舎プロジェクトの活動資金になります。

2014年5月24日･25日に、瀬戸内に浮かぶ島で活動する人を集めた交流イベント「ぐるぐるしましまあるある」を開催しました。音戸、宮島、下蒲刈島、御手洗、大崎上島、弓削島、因島、大三島、周防大島、小豆島から参加者が集まりました。

貸し出しイベントとして、6月29日に「艦これ限定同人誌即売会」の会場として利用いただきました。江田島市外、広島県外から多くの参加者が集まりました。イベントにあわせて、江田島市観光協会、江田島市商工会と協力して、江田島市内各地をめぐる「スタンプラリー」や、江田島小用港での朝市「みなとオアシスえたじま」を開催しました。海友舎では、NPO法人高田っ子倶楽部の協力により江田島郷土料理「大豆うどん」を販売しました。

学ぶ

海友舎は、日本近代建築を象徴するような西欧風の外観を持つ木造建築です。勉強会を通して建築やまちづくりについて学びます。また、周辺地域の歴史や町並みを知るための歴史調査や、歴史ある小道や民家、お寺などを巡る、周辺散策ツアーも開催しています。

江田島は、海軍兵学校があった場所として知られていますが、これまで海軍兵学校が島にやってきたことに影響をうけた”島の暮らし”について、あまり語られることがありませんでした。ひとの記憶からまちの記憶を掘り起こし、江田島独自の暮らし文化を広く発信していきます。

調査のプロセス

ステップ 1- モノをみつめる「海友舎の“お宝”発掘」

海友舎には、さまざまなモノが残されており、ぐるぐる海友舎プロジェクトメンバーでは“お宝”と呼んで整理保管活用しています。海友舎は、江田島海軍下士卒集会所として建てられ、戦後は地域の戦争未亡人などへの職業普及事業の一環として、洋裁学苑の場として使われていました。

その当時に使用されていたと思われる“お宝”が残っており、今では見ることのできないような貴重な資料もあります。この“お宝”から、海友舎で、いつ、どんな人が、どのように過ごしたのかを想像していきます。

ステップ 2- エピソードを集める「なにげない話の記録」

海友舎から発掘された“お宝”について、建物の所有者や江田島地域の歴史に詳しい人等のキーパーソンからヒアリングを行いました。海友舎の“お宝”をきっかけに新たな出会いがありました。また、「江田島にある、あの洋館で若い人たちが活動しているらしいよ」という噂を聞いて海友舎や江田島地域で過ごしたことのある人から連絡をいただきました。県外から海友舎を訪れる人もおり、江田島地域でのエピソードを集めました。

海友舎をきっかけに出会った証言者（年齢 / 居住地）

□海友舎に関係するキーパーソン
- 海友舎の所有者（80 代 / 広島県呉市）
- 海友舎の近所に住むおじいちゃん（90 代 / 江田島市・中郷）
- 海友舎のある地域で生まれ育った郷土史研究家（60 代 / 江田島市・向側）
- 海友舎がある地域でコミュニティサロン世話人（80 代 / 江田島市・向側）

□ 海友舎の“お宝”に関する証言者
- 海友舎でおこなっていた「江田島洋裁学苑」の生徒（80 代 / 江田島市・中郷）
- 「江田島洋裁学苑」に通っていた生徒の息子（70 代 / 江田島市・中郷）
- 海友舎に住んでいたお嬢ちゃんの中学校の先生（90 代 / 江田島市・鷲部）
- 海友舎に住んでいた女の子と仲良かった人（80 代 / 江田島市・中郷）
- 下士卒集会所の職員（90 代 / 江田島市・向側）
- 海友舎で暮らしていた人の娘（80 代 / 東京都）
- 小学生の時に戦艦榛名をみた地域住民（70 代 / 江田島市小用）
- 海軍兵学校生徒として海友舎の周辺で過ごした人（90 代 / 東京都）

□活動を知り海友舎に訪れた江田島地域の変容を知る人
- 海友舎の離れで暮らしていた元自衛官の夫妻（70 代 / 山口県）
- 子どもの時に海友舎の庭で遊んだ人（60 代 / 神奈川県）
- 子どもの時に海友舎の庭で遊んだ人（70 代 / 江田島市）
- 子どもの時に海友舎の庭で遊んだ人（60 代 / 広島市）
- 海友舎に遊びにきてくれた人〔進駐軍の事務・日系二世〕（80 代 / 東京都）
- 海友舎のある地域でコミュニティサロン世話人の同級生（70 代 / 神奈川県）

ステップ 3- イベントにする「江田島の魅力を体験」

海友舎をきっかけに出会った証言者からの話をもとに江田島地域独自の魅力を探り、ぐるPメンバーとともに海友舎周辺地域の散策ツアーや地域住民との交流イベントを行いました。また、海友舎の“お宝”を活用したイベントの企画、専門家を交えた調査や勉強会を行っています。

【海友舎周辺地域の散策ツアー】

海上自衛隊第一術科学校・見学（2014 年 4 月・8 月）
元自衛官のガイドで、海上自衛隊第一術科学校（旧海軍兵学校）の見学会を行いました。敷地内には、明治、大正に建てられた歴史的建造物が残っています。江田島を代表する見学施設として、平日は 3 回、土日祝日には 4 回、所要時間 1 時間 30 分で決められた順路での見学ができます。
毎年、桜の季節には、開花時期に合わせて構内の一般公開があり、夏には海上自衛隊の敷地内で花火大会「江田島サマーフェスタ」があり、指定された範囲内を自由に散策ができます。

旧海軍小用北官舎・見学（2014 年 6 月）
江田島町小用には、海軍兵学校に通う職員のための官舎が建てられました。現在は、払い下げにより住宅として使われています。

江田島銘醸・見学（2014 年 8 月）
海軍兵学校とゆかりある酒造「江田島銘醸」の見学を行いました。江田島に海軍兵学校が設立された後“海軍御用酒”とされていました。江田島銘醸では、海軍関係資料の展示があり、お酒の試飲もできます。

【地域住民との交流イベント】

正藤繁さんのお誕生日祝（2014 年 8 月）
海友舎のご近所にお住まいで活動を支援いただいている正藤繁さんが 8 月 25 日に 100 歳のお誕生日を迎えました。ぐる P より感謝の気持ちを込めて色紙とプレゼントを贈呈しました。

永橋為成さんを囲む会（2014 年 12 月）
幼少期に江田島で過ごした永橋さん（神奈川県在住）を囲んで同窓生が集まり、当時の話をしてくださいました。

【海友舎の“お宝”を活用したイベント】

書籍の展示（2014 年 5 月）
雑紙や小説など海友舎に残る書籍を展示しました。

海軍関係資料に関する企画展示 @ 教育参考館（2014 年 8 月・10 月－ 12 月）

【江田島地域の歴史に関する勉強会】

宇根川進の江田島歴史講座―海軍兵学校の移転と江田島―（2014 年 10 月）

発信する

海友舎で行われるイベントやワークショップを通じて、ここを訪れるさまざまな人々と交流し、江田島の魅力を発信していきます。また各地で開催される発表会にも積極的に参加し、海友舎と江田島のアピールをしています。ワークショップ成果品の配布や、海友舎オリジナルグッズの制作販売を行っていきます。海友舎オリジナルグッズの収益は、海友舎を後世に残すために大切に使われます。また、海友舎オリジナルグッズを通して、ぐるぐる海友舎プロジェクトの魅力や想いが広く発信されることを期待しています。

今後の予定

– ぐるぐる、こつこつ、わくわく -

ぐるぐる海友舎プロジェクトは、海友舎に興味がある人、江田島に興味がある人、建築に興味がある人、まちづくりに興味のある人など、さまざまな人を「ぐるぐる」と巻き込みながら活動を広げていきます。

ぐるぐる海友舎プロジェクトの発足から2年が経過しました。これまで、地元住民から専門家までさまざまな人の協力を得て活動を続けてくることができました。メンバーや関係者との話し合いの時間を大切にして「こつこつ」活動を展開していきます。

海友舎を利用していた人やぐるぐる海友舎プロジェクトに参画したみんなが、「わくわく」できる活動を継続的に展開していくことを目指しています。

メンバーの感想

➡みんなで掃除を一斉にはじめて一緒に作業をして達成感がある。江田島の人とはじめて参加する人や江田島市外から通う人、さまざまな人と交流できるのが楽しい。
➡困ったときに助けてくれる人が必ず現れる。人との繋がりが大切。
➡海友舎から見つかった、海友舎に暮らしていた子供の教科書（昭和 20 年代）が可愛くて印象に残った。
➡洋裁学校の看板や資料を見ることでリアリティを持って話を聞けた。
➡はじめはビリヤード台とは分からなかった。今は土台がなくなりビリヤード台として使うことができないけど復活させたい。
➡見る人が変わると、新しい価値が生まれる。
➡海軍兵学校の関係者の家族が通った「従道小学校」や日曜日に海軍兵学校の生徒が過ごした民家「生徒倶楽部」など、江田島に住んでいても知らない話が聞けて良かった。
➡海友舎をきっかけに、いろんな人との繋がりが生まれて不思議な感じがした。
➡戦後 70 年を迎えて祖父母も戦争を知らない世代になる。自分の祖母の終戦時は小学生で、戦争には行っていない。食べ物がなくて貧しくて大変だったという話を聞くが、戦争に行った人の話を聞いたことがなかった。
➡海友舎をきっかけに出会った人から、江田島地域の歴史に関する証言を集めることで、これまで歴史から抜け落ちてきたような一般人の暮らしの話が聞けた。固い話ではなく、何気ない柔らかい話を集めていくことが重要なことだと思う。
➡さまざまな立場や年齢の人からの記憶や体験談を並列に並べることで、江田島という場所の歴史が立体的に見えてくると良い。
➡日本近代史を語る上でかかせない江田島の地域の歴史を見つめ直すことで、現代に活かせる価値観を学び継承したい。
➡記録と発信を行うことで、江田島にいきたくなるきっかけづくりになると良い。継続的に調査を行いたい。

総評

ここに掲載している「総評・講評」は、
助成決定時の資料をそのまま載せたものです。
選考委員の肩書きも助成決定時点のものです。

選考委員会委員長 鈴木輝隆 ［江戸川大学教授］

はじめに

今回も応募件数が224件と多く、住民のコミュニティづくりへの関心の高さを実感しました。グローバル化が急速に進展し市場主義が進み、効率性や合理性が求められ、相互扶助がなくなりコミュニティが空洞化し、これを解決しようとする住民活動はますます求められているのでしょうか。

当財団のミッションは助成金が住民活動に有意義に使われ、活力ある楽しいコミュニティの実現につながることで達成されます。ただ、近年増えてきた若い人たちの活動は、実際事業を始めてみて持続することの難しさに気がつき、どうしていいのか困っている場面も出てきています。活動団体の事業を継続させる方法や経営にまで、これまでに助成した団体とともに知恵や工夫を出していくことも必要な時代になっています。選考された団体は活動を実施していく中で困ったことなどありましたら、財団に相談していただき、これまでの経験とノウハウを得ることで、より効果を上げてほしいと願っています。

選考にあたって

ここ数年の傾向を大きく括りますと、古民家を修復し活用する空き家系、貴重な建造物を伝承し活かす伝統建造物系、芸術活動で活性化を行うアート系、コミュニティ活性化の拠点を作るカフェ系、集客力を活用する商店街活性化系、コミュニティとしての子育て系、若い人が主体となる若者系、震災復興を行う災害支援系、条件不利地域の村おこし系などがあります。これまでにはない視点からのコミュニティ活動で、今後の指針となる内容のものは高い評価が得られます。

選考された団体について

今回選考しました団体への評価を簡潔にまとめてみました。

ダッズ村プロジェクトは父親と子どもが一緒になり、子育て支援拠点を建設することは冒険のようで楽しい活動です。父親の子育てを中心に展開される事例は珍しくしかも分かりやすい活動と評価されました。

特定非営利活動法人WACおばまは伝統的な「アブラギリ」をテーマに住民と高校生が一緒になり栽培・活用・商品化を進める里山再生事業で、伝統文化伝承や産業的、教育的な意義は大きく、成功事例に育ってほしいと継続助成することにしました。

加子母村づくり協議会は木材産地の工務店と10大学で「木匠会」を結成し、木造住宅の技術の伝承などを通じて地域と学生の交流が20年間も続いてきたことに感心しました。住民自治組織の象徴的な建物「明治座」の修復を行うことは輝かしい成果になります。

きよさと移住者ネットは農村部にお嫁に来た女性の産後ケアや子育てを支援することをめざしています。移住者の経験が基になった女性の視点が評価されました。

特定非営利活動法人えき・まちネットこまつは、高校生が駅を守るために立ち上がり、その活動に専念するために退職した先生や卒業生が一緒になってJR駅業務を受託、イザベラバードや井上ひさしをテーマにしたまちづくりに取り組むことに期待しています。

特定非営利活動法人醸造の町摂田屋町おこしの会は大学生や市民の参加を得て伝統的建造物「サフラン酒本舗」を一部修復し公開イベントを開きました。ただ雨漏りの補強などなお緊急性がある修復が求められていることから、継続助成を決めました。行政の理解も得て後世に残してほしいです。

かやの木会は20年以上続けてきた活動から、山村生活の記録と伝承を大学と連携する創造的サバイバルに期待しています。

ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会は若者たちが江田島独特の暮らし文化をデザインした冊子の出版から伝統的建物への理解を深めることに期待をしています。

特定非営利活動法人FLAGは、基地が持つ「米軍ハウス」を活かして、独特のコミュニティを築くことに惹かれ評価されました。

特定非営利活動法人旧御師・丸岡宗太夫邸保存再生会議は、伊勢に残る1軒しかない貴重な歴史遺産で、財団の助成がきっかけで修復がはじまり、さらに全国モデルとなるようなツインタイムトラベルをめざしています。

さいごに

選考委員はできる限り現地に行き、助成金を出すだけでなくアドバイスなど行い継続力のあるコミュニティ活動団体を育てることも役割であると思っています。

講評

［office mikiko 代表］

昨年度に引き続き、2回目の審査に関わらせて頂きました。選考にあたって重視したのは、地域の特徴を汲み上げていること、多くの共感を得られる案であること、一過性のイベントに終わらず継続的な活動であること、メンバーの推進力と求心力が強いこと、そして、できるだけ多くの人が参加でき、次世代へのバトンタッチを見据えた教育的な内容が盛込まれていることでした。

その中でも、これまで国内外の地域の課題解決にデザイナーとして関わって来た経験から、二つのことを重視しました。まず一つめは、「独自のチャーミングさ」についてです。このような活動で重要なのは、どれだけ参加する人がワクワクし、大人からこどもまで沢山のファンが集まり、地域外の人でも「行ってみたい、住んでみたい！」と思える、斬新でオリジナルな魅力があるかです。ですので、他の地域でも見たことのありそうな企画や、思想は素晴らしくても楽しさや明るさに欠け、人が集まるか疑問に思えるものは、対象から外させて頂きました。

二つめは、「地域の人がどれだけエンパワーされるか」です。様々な問題を抱える地域が、その魅力を再発見して活気を取り戻すためには、ある程度、外部の客観的な視点や専門性を持った人の協力が必要です。しかし、その協力者のほうが主人公になってしまっては、それを今後も育む地域の人が育ちません。あくまでも主人公は、その地域の人たちです。ですので、住民の参画について具体的な計画がされている案を積極的に採用し、外部講師の招聘費用など地域外の人が動くことに予算が多く振り当てられている案は、対象外とさせて頂きました。

今年度は残念ながら、応募書類を拝見する限りでは、強く応援したい、是非訪問したいと思える活動が少なかったです。限られたフォーマットで活動の本質をアピールするのは難しいとは思いますが、どんな場面でも100%魅力を伝えることは、人を動かすのに大切なことです。「私たちが、活き活きとした日本を取り戻すお手本になるのだ！」という強いモチベーションで、どうぞこれからも活動を続けて頂けたらと思います。

選考委員
窪田亜矢 ［東京大学 准教授］

「住まいとコミュニティづくり」という本活動助成の主旨は、改めて考えてみると不思議なところがある。「住まい」とは個人や世帯のモノという素朴な認識があり、一方で「コミュニティづくり」と掲げているからだ。

近代化が進む前、地域社会は地域の環境を享受する方法をもっと熟知していた。農業や漁業や林業といった地域の大地と向き合いながら、専業というよりは生業複合によって生きてきた。一番重要な単位は「家」だが、今で言う「コミュニティ」も生き抜くためには本質的な存在だった。産業構造の転換や家族のあり方の変容などを経て、当然のようにめぐっていた時間が、地域に固有の循環が、おかしくなってしまった。今回、助成に向けて推させていただいたのは、そうした循環を元に戻そうとしている取り組みである。必ずしも選定結果がそうなっているというわけではないのだが、私個人はそのように考えた。

地域が活性化するというときの根底にあるのは、そこでの暮らしが続いて行くであろうという希望だ。さらにいえば、その希望を、一人ではなく、地域において共有できることではないかと思う。そうした結果として、「コミュニティ」なるものが生じるのではないかと考えている。

地域における循環を創造するという壮大なプロジェクトもないことはなかったが、あまりの困難さゆえに実現性に乏しかったり、連携まで語れなかったり、短期的なビジネス開発のように読めたり、といったところに留まってしまったものが多かった。しかしそうした状況を単に残念だという感想で終わらせるのではなく、ささやかながら引き取って自分なりの展開をしていきたい。今回、申請が適わなかった皆様には、どうぞあきらめずにもう少しだけ取り組んでいただいて、そのご経験をふまえたうえで、より確度が高く、実際の現場で突き当たった問題を超えるためのご提案を来年もしていただければ大変有り難いと思っている。

選考委員
小伊藤 亜希子
［大阪市立大学 准教授］

今年も地域の歴史的建築資源を再生し、それを拠点にしてまちづくりに取り組もうとする試みが多く見られました。中でも地元住民が主体で、地域への“愛”が感じられるものが選ばれました。加子母むらづくり協議会は、建築系学生に木造建築づくりの実習の場を提供し、次世代の担い手を育てながら地域おこしに成功している貴重な取り組みです。20周年を節目に明治座の改修に挑戦するとのことでぜひ応援しようということになりました。FLAGは、若いアーティストたちが米軍ハウスに自ら住み、住み開きをしながら活動している団体で、とにかく楽しく活気に溢れているところが評価されました。地域に根付き、地域の住民を巻き込んでネットワークが広がることを期待します。

過疎や限界集落の再生を目指す活動も各地で見られました。人口減少時代に入り、高齢化と過疎化に悩む集落の課題は、簡単には解決できない深刻さを増していると感じました。そんななか、きよさと移住者ネットは、既存住民が移住者を迎え入れようとする暖かいコミュニティづくりの取り組みです。特に目新しい活動内容という訳ではありませんが、地域のニーズを直接受け止めたこうしたごく日常的な取り組みが大切であると選定されました。

すでに過去に本助成を受けたことのあるプロジェクトへの助成については、同じところに重複して助成するより、なるべく広く多様な活動に助成すべきという考え方もありましたが、今年は、きちんと成果をあげていることを前提としながら、継続してバックアップし、活動を育てる方針としました。えき・まちネットこまつ、WACおばま、醸造の町摂田屋町おこしの会、旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議は、それぞれ2度目の助成となりますが、さらなる活動の発展を期待します。

選考委員
図司直也［法政大学 准教授］

本助成には地域づくりの最前線の動向と重なり合うところが多く、毎年結果を楽しみにしています。その点で、今年度の応募書類の中には、最終選考まで残りながら最近の潮流への意識が弱いために、散漫な内容が見受けられたのは気になるところです。そこであくまで私見になりますが、今後の活動に活かして頂きたい想いも込めて、以下に4つの要点をまとめてみます。

一つ目は、何より「独自性」です。本助成には全国各地からの応募がある中で、納得して選べる要素が見出されるか―例えば、新規性の強いものであったり、地域の特徴を前面に打ち出したり―が大きな決め手になってきます。その点で、今年度のダッズ村プロジェクトは、子育てを担う父親主導の地域づくりはこれまでにない新しい視点であり、意欲的な活動報告を期待したいところです。

二つ目は、「総合性」です。「住まいとコミュニティづくり」という助成名には、ハードとソフトの両立が目指される活動への助成が詠われています。その点で、加子母むらづくり協議会は、合併前の地域をカバーする協議会が主体となって、加子母木匠塾の開校20周年を祝って学生たちとともに芝居小屋の改修を行うプログラムであり、ハードとソフトの両面をうまく織り込んだ取り組みです。限られた助成金をうまく活用する知恵にも注目したいところです。

三つ目は、「継続性」です。助成期間は1年間ですが、翌年以降は財源がなくなったために活動が行き詰ってしまっては本末転倒です。その点で、特定非営利活動法人えき・まちネットこまつは、NPO法人の設立に伴い、助成だけに頼らない財政基盤の確立を目指して、資源活用の新たなプログラムが打ち出されています。経済的にも自立を目指した活動の展開も欠かせません。

そして最後に四つ目は、「主体の多様性」です。特定非営利活動法人WACおばまは、10年近く活動してきたNPO団体が、地区住民や高校生とともに、アブラギリという資源の活用を多角的に進める内容です。このように、女性や子どもたち、若者や地域外の人材など、様々な主体の巻き込みや広がりから時代にあった新たな価値が地域に生み出されて欲しいところです。

このような要点を自らの活動に引きつけてアピールするには、客観的に活動を振り返る作業も大事になります。その点で、これまでの助成対象団体をはじめ先発的な活動からも知見を得た、意欲あふれる応募書類が次年度に届くことを期待したいと思います。

選考委員
高見沢 実［横浜国立大学 教授］

今回の10件は、継続または以前に助成されたプロジェクトが多く、それらはいずれも継続的に発展がみられるという意味で頼もしい存在です。例えば、旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議は平成23年の助成対象団体ですが、当時、まだ始まったばかりの活動の発する魅力を申請書に感じ取り、イベントの際に私も参加させていただき、申請書だけではわからない現場のポテンシャルを強く感じていましたので、今回の進展がとても楽しみです。えき・まちネットこまつはさらに1年さかのぼりますが、当時、高校生たちの活動が魅力的でした。どう展開しているか楽しみです。昨年度からの継続となるWACおばまと醸造の町摂田屋町おこしの会は、昨年も高い評価だったものです。

逆に、今回初めての新しいテーマで注目されるのはダッズ村プロジェクトとFLAGです。ダッズ村は多くの委員が言及すると思いますので、現代文明論を示すポンチ絵が魅力的だったことだけお伝えしておきます。もう1つのFLAGは、他にないユニークさに惹きつけられました。最近、「右肩下がり」の時代状況からどうしても“空家・空地活用”“限界集落”などに注目が集まりがちですが、一方で、これからの日本には多様性が必要です。FLAGには、明るくいろいろな人たちと交流し、日本でありながら日本ではない“米軍ハウス”を媒介として活動を盛り上げようとするエネルギッシュな魅力があります。ゆくゆくは首都圏をぐるっとつなぐ「国道16号線サミット」などに発展してもよいのではなどと妄想（?!）も抱きながら、注目していきたいと思います。

なお、江田島で活動するぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会は、図書の作成を一段目の目標にしてそれを活動PRの材料としつつ、一方で活動拠点の厨房を改造して自立した資金を得る活動へ発展させていこうとする方針が注目されます。

東日本大震災後関連では、南相馬市朝日座を楽しむ会の活動が継続・進化し、昨年末には朝日座が登録文化財になるところまで到達しています。引き続き、過去の助成対象団体にも注目していきたいと思います。

一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

「この まちが いい！」を応援します。

「住まいとコミュニティづくり活動助成」2014年度の助成対象団体を募集します。

助成内容	2014年度1年間の活動に助成を行います。 ※助成期間は2014年4月1日から2015年3月31日までの1年間。
助成金額	1件あたり100万円を上限とします。 ※助成額は、申し込みいただいた金額通りとならない場合もあります。
募集期間	2013.11.22（金）―― 2014.1.15（水）必着

1 助成の対象となる団体および活動

1. 助成の対象となる団体

営利を目的としない民間団体（特定非営利活動法人もしくは法人化されていない任意の団体）。団体として、代表責任者が明確であること、意思決定のしくみが確立されていること、予算決算を含む会計処理が適切に行われていることが必要です。

2. 助成の対象となる活動

「住まいとコミュニティづくり」に関わる以下のような分野についての活動。

A　社会のニーズに対応した住まいづくり

社会の多様な課題に応えることのできる新しい住まい方・住まいづくりの提案、既存の住宅の再生や利活用、地域の人々や入居者が参加して行う住まいづくりなどを目指す活動。

B　住環境の保全・向上

歴史のある建物の保全・活用、花や緑を増やす、街並景観の向上、バリアフリーのまちづくり、高齢者や障害者などに対する居住支援など、住まいの環境をよくする活動。

C　地域コミュニティの創造・活性化

子どもの遊び場やお年寄りがくつろげる場所の整備、地域のシンボルとなる施設や文化の活用、地域の連帯を強める創造的な活動など、地域のコミュニティの創造・活性化につながる活動。

D　安全で安心して暮らせる地域の実現

地域における犯罪等の発生を少なくするための取り組みや、自然災害等の被害を軽減するための地域社会の形成に資する活動、自然災害からの復興を進めるための活動など安全安心な地域の実現を目指す活動。

E　その他

その他、豊かな居住環境の実現につながる活動。

2 助成の実施

1. 助成の方法

助成を受ける団体は、当財団と覚書を取り交し、これにもとづいて活動を実施することとし、助成金は年２回（5 月、11 月）に分けて支払います。

2. 報告書の提出

活動は所定の様式に沿った報告書としてまとめ、中間報告を2014年10月に、完了報告を2015年5月に提出していただきます。ご提出いただいた報告は、そのまま当財団のホームページに掲載させていただきますのでご承知おきください。

3. 交流会 1　＜開催地：東京＞の開催

毎年夏に、前年度の助成対象団体が活動成果の発表を行い、住まいづくりコミュニティづくりに興味のある方々やこの分野の専門家等を交えた交流・懇親を図る交流会を開催します。助成年度の翌年度の交流会には活動成果の発表を行っていただきます（1 名分の交通費はお支払いします）。なお、来年の交流会当日、助成中の団体（今回助成対象となった団体）を対象とした情報交換を図る意見交換会を併せて開催する予定です。

4. 交流会 2　＜開催地：東京以外＞の開催

交流の機会を増やし、他団体の活動の実態に触れることを目的として、過去の助成対象地域（ホスト役：過去の助成対象団体）において交流会を開催します（助成年度の 5 月頃）。参加される場合は、1 名分の交通費をお支払いします。

5. 助成年度

助成は原則として 1 年間とします。なお、継続して助成することがありますが（3 年間を限度とします）、この場合も各年ごとにあらためて申し込み、選考を受ける必要があります。

6. その他

助成期間中、進捗状況の報告、意見交換等に協力していただきます。なお、活動が継続困難となった場合は、途中で助成を打ち切り、助成金の返還を求めることがあります。

ハウジングアンドコミュニティ財団は、豊かな住環境の創造に貢献することを目的として、1992 年に設立されました。「住まいとコミュニティづくり活動助成」事業は、財団の自主事業として1993年から開始した助成プログラムです。全国の市民の自発的な住まいづくりやまちづくり、地域づくり活動を一貫して支援してきました。21 年間にわたる助成件数は延べ 312 件にのぼります。この助成がきっかけで大きく発展した活動も増えています。意欲に満ちた皆様からのご応募をお待ちしています。

3 助成対象の選考

1. 選考方法

申込書（参考資料を含む）をもとに、「住まいとコミュニティづくり活動助成選考委員会」にて厳正に選考、決定します。なお、選考の過程では必要に応じて資料の提出をお願いしたり、問い合わせに答えていただくこともあります。

「住まいとコミュニティづくり活動助成選考委員会」

委員長	鈴木輝隆	江戸川大学
委　員	遠藤幹子	office mikiko
委　員	窪田亜矢	東京大学
委　員	小伊藤亜希子	大阪市立大学
委　員	図司直也	法政大学
委　員	高見沢実	横浜国立大学
委　員	篠原正積	ハウジングアンドコミュニティ財団

2. 選考団体数

10 件程度を選考する予定です。

3. 選考のポイント

次のような多様な観点から選考します。

テーマ　個性豊かな住環境の創造に貢献するものであるか。地域の課題やニーズを的確に把握し、活動の目的・目標が明解になっているか。

視点　独自の視点で取り組もうとしているか、地域や社会に向けた新しいメッセージや提案があるか。

手法　活動を実施する手法が明確になっているか、工夫されたものになっているか。

実行性　具体的に計画（活動内容や活動資金）が練られているか、活動を実施するための体制や準備が整っているか。

継続性　助成期間終了後も継続的な活動が期待できるか、自立した活動として発展が期待できるか。

波及性　地域への影響力や他の地域への波及効果があるか。

4. 選考結果の発表

選考結果については、2014 年 3 月下旬までに、応募者へ書面にて通知するほか当財団のホームページ上にて公開します。なお、選考結果についてのお問合せはご遠慮ください。

4 応募の手続きについて

1. 申込書様式の入手方法

所定の申込書様式は当財団のホームページよりダウンロードすることができます（なお、電話等でご連絡いただければ、申込書様式を送付します。）。

http://www.hc-zaidan.or.jp/

2. 申込書の書き方

申込書様式は、word 形式ですので、パソコンで作成してください（黒のペンまたはボールペンにて、楷書でご記入いただいても結構です。）。また、申込書については、記載紙面の追加等の作り変えおよび所定の申込書以外の使用は認められません。

3. 申込に必要な書類

1　申込書（上記の様式による）

2　ビジュアル資料

A３サイズの用紙１枚に、応募する活動の内容や活動の対象地域の地図などをわかりやすく、図や絵、写真などでビジュアルに表現したもの。なお、応募する活動に繋がるこれまでの活動について書き込んでいただいても結構です。

3　「参考資料」

◎これまでの実績がわかる資料
◎昨年度（2012 年度）の会計報告および活動報告
※上記資料がない場合は、提出する必要はありません。

4. 申込書の提出方法

申込書と二つ折りにしたビジュアル資料とともに（ホッチキス不可）、参考資料を同封して当財団あてにお送りください。E-mail および FAX による送付はお断りいたします。
また、提出資料は返却いたしません。

5. 個人情報について

申込書にご記入いただいた個人情報は、本助成事業の目的以外に使用しません。

※今年度（2013年度）の助成対象団体の概要、昨年度（2012年度）の助成対象団体の活動報告は、当財団のホームページでご案内しています。

申込書提出先／問い合わせ先
一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団(助成係)
〒105-0011 東京都港区芝公園2-11-17 朝井ビル４階
TEL：03-6809-1408（土日祝を除く午前9時半～午後5時半）
FAX：03-6809-1438
URL：http://www.hc-zaidan.or.jp/

第 22 回　住まいとコミュニティづくり活動助成報告書
発行日　2015 年 9 月 5 日

編集・発行　一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
〒 105-0011　東京都港区芝公園 2-11-17　芝公園下山ビル 4 階
TEL.03-6809-1408
FAX.03-6809-1438
http://www.hc-zaidan.or.jp/

デザイン　Takemura Design & Planning
イラスト　柴田ケイコ
印刷製本　弘文印刷株式会社

Housing
and
Community
Foundation